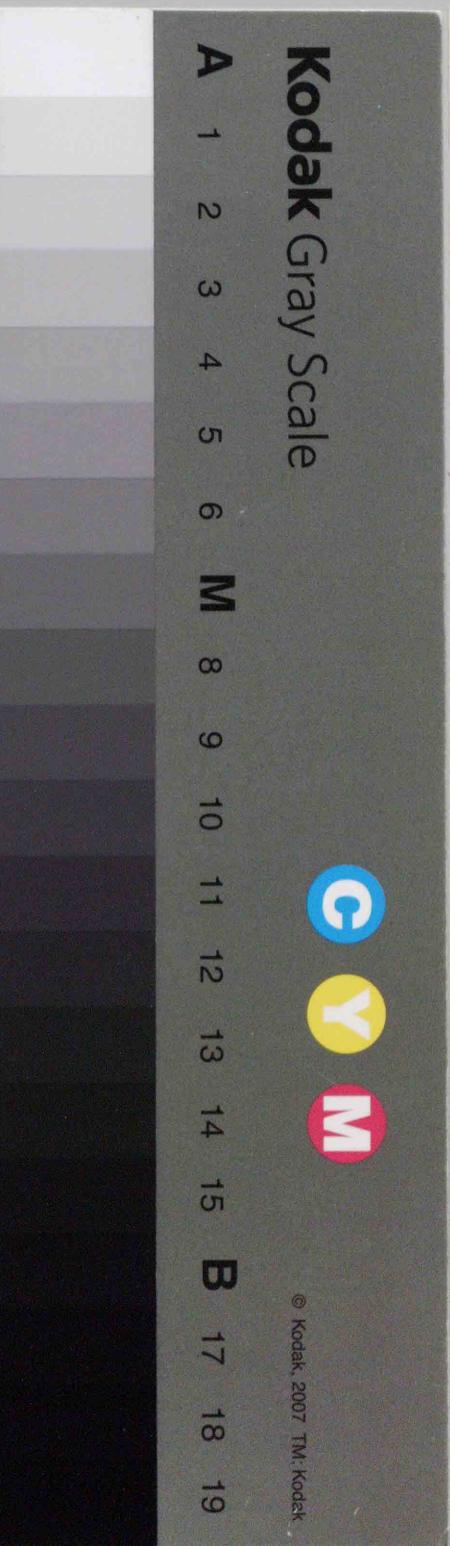
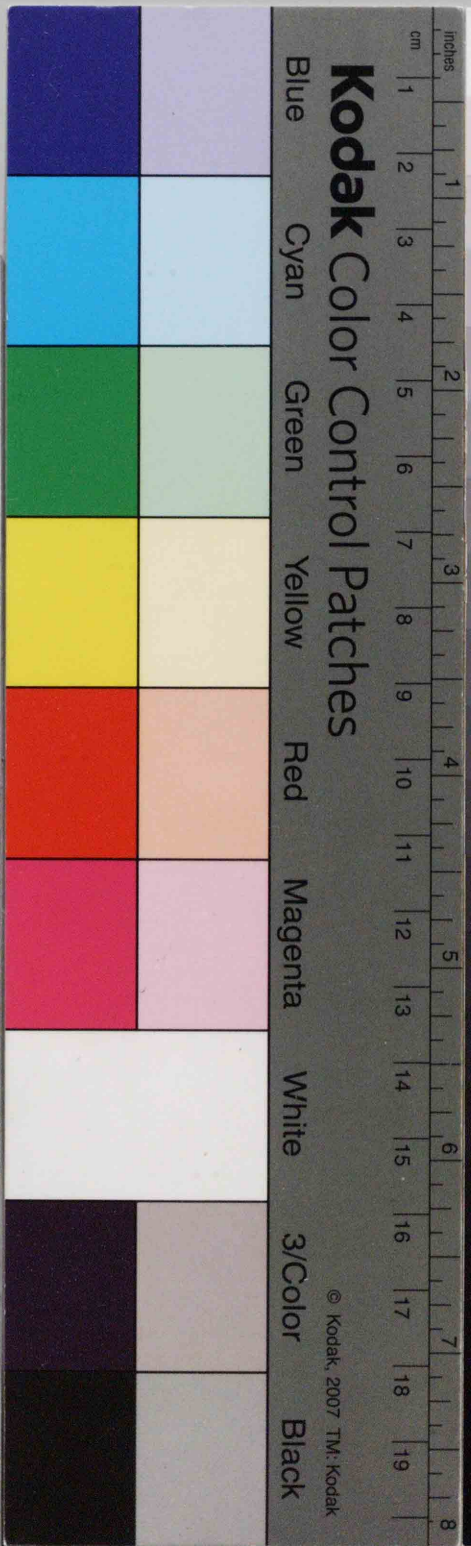
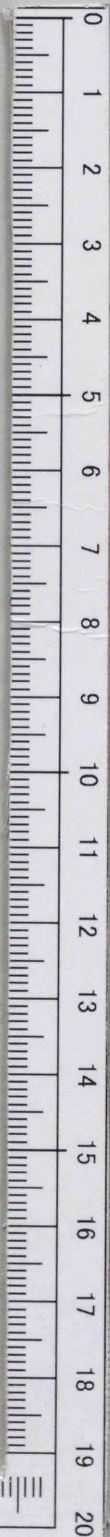


大正副讀本 卷四

375.9
Hol9
資料室



41416
教科書文庫

4
810
41-1922
200030
1717

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

資料室
大正十一年五月十日
文部省檢定
中學國語教科用

375.9
H019

保科孝一編



大正副讀本
書古

東京
會社育英書院發兌

大正副讀本 卷四

目次

- 一 光榮に輝くバッキンガム宮殿……………二
- 二 舊世界から新世界へ……………一七
- 三 晴れわたりたる空のもと……………二四
- 四 新院御經沈……………三六
- 五 義朝野間下向……………三〇
- 六 徒然草抄……………三五
- 七 京囚江戸送(自修文)……………四七
- 八 水鳥の羽音その一……………五六
- 九 同 其の二……………六

目次

一〇	薩摩守忠度	六
一一	建禮門院の大原入御	七
一二	重衡受戒	八
一三	方丈記抄	九
一四	千波の湊	九
一五	朋友選ぶべし	一〇
一六	明智左馬介の湖水渡り	一〇
一七	後藤基次	一四
一八	おらが春	一六
一九	上海公園のテニスコート	一三
二〇	岩崎谷	一六



大正副讀本 卷四

バツキング
ム宮殿
イギリス皇帝
の常居の宮殿

一 光榮に輝くバツキングム宮殿

光榮に輝くバツキングム宮殿の晝が、殿下の御到着に依つて初まつたのに對して、光榮に輝く其の宮殿の夜は、その大舞踏室に開かれた王宮晚餐會に依つて幕が開いた。其の夜の會場は「輝く」と云ふ字が實際に當てはまるほど、燈光に輝き、周圍の裝飾に輝き、式典に輝き、賓客に輝いたのであつた。其處には、戦時中曾て一夜も見ることの出来なかつた華しい美しい夜があつた。壁は悉く目も眩いばかりの金

欄を以て飾られ、玉座の下に近く食卓が作られて、賓客は何れも金色燦爛たる禮装をして、食卓には全部黄金の食器が配置され、それら凡ての輝かしいものが、華やかな燈火の光の中に相映發して居る光景は、大英國の昔ながらの典雅を思はせ、而も又ローマンチックなものであつた。會場の開かれたのは、午後の八時半であつたが、其の時第一に先づ、英國人等の所謂英國の偉大なる同盟國の皇儲たる我が皇太子裕仁親王殿下が、英國皇后陛下と御手を組ませられつゝ、御入場になると、其の次には英國皇帝が第一皇女の御手を取らせられ、閑院宮殿下はメリー内親王を、英國皇太子殿下はクリスチャン王女を伴はせられて、靜に御入場になり、や

がて、我が皇太子殿下は英國皇帝陛下と英國皇后陛下との御間に、閑院宮殿下は皇后陛下の御右に、其の御隣にはメリー内親王が御着席あらせられた。

斯くして、主賓の方々の御席が先づ定まると、其の次にはコンノート公、ビアトリース内親王、首相ロイドジョージ氏、スペイン・ベルギー、ブラジル、佛蘭西、伊太利、獨逸等の、各大使、公使を初め、日本大使館員、カンタベリー大僧正、上院議長、重立つた陸海軍將官等と、並に其の夫人等で百三十名が、何れも男子は皆綺羅美しい大禮服に光榮の身を装ひ、夫人等は色とりどりの華やかな美服に光輝燦々たるダイヤモンドや眞珠を飾つて、まばゆき電燈の光を浴びながら入つて行つ

カンタベリー大僧正
 ロンドン東
 南六十二哩
 あるカンタ
 ベリー町の有
 な大寺院の長

て、各皆定めぬの席に着いた。

此の時室内の有様を見渡すと、食卓は二個据ゑられ、卓上には英國皇室の國寶とも云ふべき有名なる黄金の皿が飾られ、室内は普く赤のチュールリップと白石楠を以て飾り、ロイヤル砲兵の軍樂隊が一隅に控へて奏樂の御合圖を待ち、侍者達は皆其の身分と職業に應じて、小姓は白、舍人は緋色と黄金色、皇帝の近衛ヨーマン隊はチュールドル式の美しい制服を身に纏ひ、皇帝御椅子の直後には、同じく近衛ヨーマン隊員の制服を着用した體格の最も雄偉な者が侍立して、席上には莊重嚴肅の氣分が充滿して居た。此の夜日本側では、主賓におはせられる東宮殿下、閑院宮殿下を初め、珍田供

ヨーマン隊
イギリス皇帝
の近衛兵
チュールドル
式
一四八五年か
ら一六〇三年か
までの間、イ
ギリスを治め
た王朝をチュ
ールドル王朝と
いふ。此の朝
に制定された
制服をいふた
珍田供奉長
伯爵珍田捨巳

林大使
駐英大使男爵
林權助
永井參事官
在英大使官參
事官永井松三

奉長・林大使等を加へて二十一人の者が其の席に臨んでゐたが、婦人としては永井參事官夫人と、伊丹夫人とが金裝燦爛たる男子賓客の禮裝の中に異彩を放つて居たのみであつた。斯くて宴酬にしてデザートコースに入るや、やをら御起立になつた英國皇帝陛下は、我が皇太子殿下の爲に乾盃を遊ばされ、英國國民の賓客として殿下を厚く御歡迎申上ぐる旨を述べて、左記の意味の御演説をあそばされた。
「今夕殿下を、皇后及び予の賓客としてのみならず、全英國國民の賓客として茲に奉迎するを得たるは、予の深く、欣幸とする所であつて、予は日本皇帝陛下が、歴史上の前例を破り、其の皇太子殿下を我が國に御差遣あらせられた御厚誼に對

し、深く感謝しなければならぬ。殿下の御來訪は英國國民にとつては、多年地理的關係、政治的傳統、及び國民の思想に於て酷似せる我が兩島帝室を結合せる友交の象徴と稱すべく、殿下を奉迎するに當り、殿下の代表し給ふ陛下を戴く偉大なる國民に向つて、かねて賞讃の辭を呈すると共に、今回の大戦に於ける忠實なる援助と其の陸海軍の勇敢なる行動につき、感謝の意を述べ、併せて將來世界平和を維持せんが爲には、兩國の友誼的協力は缺くべからざる一要素であるといふ一信念を、此處に改めて表白したい。殿下御自身に於かせられても、今次の御訪問は英國人民の實際生活を始めて親しく御實見相成る次第であつて、吾等の國民的

自尊心より申せば、我が國民生活が、今少しく平調に復し、繁榮に向つた時に於て、殿下を御迎へ申したいと思ふが、殿下御自身の御觀察並に御見學の爲には、今日の如き好機會は又容易に得られぬ所であると信ずる。大戦の教訓は今尙吾が國民の胸奥に鮮明であつて、殿下の駕を扞げられんとする何れの都市何れの家庭に於ても、聯合國の爲に、延いて日本の爲に、大なる犠牲を拂はざるはなく、殿下は我が國の商業が、外、世界一般の疲弊と、内、租税の負擔との爲、依然不振の域を脱せぬ事を看取せられるであらう。又我が國の最も重要な工業が、峻烈なる經濟上の爭議に依つて荒廢しつつあるを見給ふであらう。然し殿下は、我等の親友なる故

に、我が苦境を御覽になりて如何なる御判断を下されても、敢て厭ふ所ではない。蓋し殿下は吾人に同情し、よく御理解あるべきを信ずるからである。回顧すれば、予が秀麗なる日本の國土を訪問したのは、賓客殿下の御年齢ほどにも達せぬ幼年時代であつた。苟くも一度日本を見た者は、永く之を忘れる事が出来ないが、當時日本人並び新日本の光榮を一身に擔はせられた聰明な天皇陛下が、予及び予の弟に與へられた深厚な歓迎は、予の永久に忘却し難き所である。今や殿下の御來遊によつて、予が其の陛下より得た厚遇を、其の孫に當らせ給ふ殿下に報ゆるの機會を得たのは、予の欣喜に堪へない所である。予の家族中、皇太子殿下の

アイサーコ
ンノート
皇の第三子、女
イギリス皇
帝陛下が、今
上から我が明
治天皇及び皇
帝陛下に奉
呈したる、
勳章を奉
呈したる、
使者として、
又明治天皇
御使の儀に
列す。我が國
へ御出でな
つたことが
ある。

祖國と最も親近の關係にあるのは、予の従弟アイサー、コン
ノート親王であつて、同親王は今や南阿に客遊し、今夕殿下
と席を共にし得ぬのは、その特に遺憾とする所であらう。
同親王は英國の主權者を代表して、三回までも日本を訪問
し、其の都度日本の厚遇と、國民の偉大な事について印象を
深くしたが、同親王が日本に遊んで特に欣快としたのは、諸
般の形式乃至束縛を脱し、廣く日本國內を旅行し、日本人の
生活状態を觀察するの機會を得た事であつて、實に日本國
民は親王をして恰も故國にあるの思あらしめたのである。
予の特に希望に堪へないのは、皇太子殿下を始とし、閑院宮
殿下並に供奉員諸君が、英國に於て恰も故國に於けるが如

く打寛がれる事である。尙昨年中予の憂懼措かなかつた日本天皇陛下の御健康も大に勝れさせ給ふと聞くのは、予の無上の喜とする所である。予は諸子に向つて吾が貴賓の爲に乾盃せん事を求めるに方り、殿下にも願はくは御自身の爲乾盃を受けられると共に、予が恒久の尊敬と厚誼とを父陛下に傳達し給はん事を。」

陛下の御挨拶が終ると、次いで御起立に成つたのは我が東宮殿下で在らせられた。と見ると、満場の視線は期せずして皆當夜の御主賓におはします我が殿下の御身に注がれたが、其の時殿下は、極めて高聲に、極めて明瞭に、さしにも広い舞踏室の隅々にまでも響き渡るやうな威嚴のあるお聲

で、大膽に御答辭を述べさせられ、珍田供奉長が之を英語に通譯し奉つて、更に之を満場に徹底せしめた。其の時の御答辭は實に次の如くであつた。

「只今皇帝陛下から御懇篤なる御言葉を拜承し、衷心感謝に堪へない。右は必ずや父陛下及び日本國民一般を感動せしめるであらう。予は陛下の御治下なる英帝國の東端に寄港して以來、到る所盛大な歓迎を受けた。右歓迎に表はれた陛下の御厚意が益、深きを加へ、本日兩陛下御自身より更にかゝる深厚な歓迎を受くるに至らうとは、予の豫期しなかつた所であつて、適當なる感謝の辭を述べるに苦しむ。今回歐洲旅行見學の第一歩に於て、風光明媚なる當國を訪

問するは、予の最も欣快とする所であつて、日本に對する英國の不變の友情及び交誼は、日本國民全體の多とする所である。日英兩同盟國間に存する親交關係は、善く時勢の試練に堪へ來り、而して陛下只今の御言葉の如く、今後も世界平和の維持の要素として尙持續せられん事は、予の最も満足とする所である。予の訪問の時機に關する陛下の御言葉に就ては感謝に堪へない。予は茲に學ぶ所があるであらう。蓋し英國國民が國步艱難の時に當り、常に勇氣と忍耐に加ふるに節制の精神及び常識を以て、善く之を忍ぶは實に感嘆措く能はざる所であつて、予は現下の問題が單に一の片雲に過ぎず、忽ち一過し去つて光風霽月を見るに至

る事を誠意希望する。只今陛下が、先年我が國に御來遊あつた事に就き述べられた一節は、眞に興味を以て拜聽した。又予は、コンノート殿下が屢、我が國を御訪問あり、御満足の由を拜承し愉快に堪へぬ。予は又陛下が予及び閑院宮並に隨員に對し、當國に於て尙家にあるが如く起居せよとの御言葉に就き、衷心より感謝する。之と關聯して申したいのは、皇太子殿下が態々ポーツマスまで予を出迎へられ、款待至らざるなく、爲に恰も本國に在るの感ある事であつて、右に對しては此の機會に於て予の深厚な謝意を表彰したい。又陛下より我が父陛下の健康に就て懇切なる御詞があつたが、父陛下の健康は幸に最近に於て著しく快方に赴

ポーツマス
イギリス海峡
に面した重要
な軍港で、且
繁華な商港で
ある

き、予の今回の外遊を允許せられるに至つた事を言明し得る事を欣幸とする。予は陛下の予に與へられた款待に對し、感謝の意を表するに當り、盃を舉げて兩陛下の御健康と御幸福を祈らうと思ふ。

殿下が右の御答辭を述べさせられて、英國皇帝、皇后兩陛下の爲に御乾盃遊ばされると、やがて晚餐會は終つて、それよりは接客室に移らせられての御款談となり、其の席には土屋子、西園寺、戸田、澤田の諸氏、押川海軍中佐、濱田陸軍少佐、二荒伯、及び英國外務省のウオトキン氏の外、東宮殿下接伴委員等も亦其のサークルに参加し奉り、ビーチー提督、ウィルソン將軍、アスキス前首相、及び各外國大使、カンタベリー、大

土屋子

東宮侍從土屋正直

西園寺

式部官西園寺八郎

戸田

東宮職主事戸田氏秀

二荒伯

宮内省書記官二荒芳徳

僧正等も其の團欒の仲間に入つたが、我が東宮殿下が、御自ら積極的に御進みになつて、夫等の人々の間に御交はり遊ばされ、山本大佐を通譯者として、極めて自由に御談話をお交はし遊ばされた御快活な御交際振には、一座の人々皆殿下の御聰明に感歎して、驚歎すべき皇子といふ讚美の言を捧げない者はなく、平常寡黙にして容易に自ら進んで他人との談話のサークルの中に加はらない無愛嬌なビーチー提督すら、殿下の御愛嬌には動かされ奉つて、航海の話や其の他の珍しい物語を殿下の御前に聞え上げたのであつた。殿下はそれからも尙一座の中心となつて、人々との御款談をお續けになつてゐたが、やゝあつて英國皇室側の御案内

で繪畫館に入らせられ、數々の名畫を御覽になつた後、十一時半頃に宴席をお退きになり、十二時過を以て御就床、バッキンガム宮殿に於ける御生活の最初の一夜をお過しになつた。

此の夜に於ける殿下の御行動が、殊に良好な印象を、何人もの胸に與へたことは言ふまでも無い事であつたが、當夜の陪賓として參列の光榮に浴した永井大使館參事官夫人が、別室で英國皇后陛下に拜謁した際、皇后陛下には「東宮殿下は御年齢もまだお若くあらせられるのに、況して今度は外國での御生活であるから、お慣れ遊ばされぬ言葉や風習などに就いて、さぞかし御苦痛に在らせられる事が多くあら

せられよう。言葉さへ違つて居ねば、自分からも其の心を述べ奉つて、お心をお慰め申すのであるが」と御同情深く仰せられ、皇女メリー殿下にも「英國皇太子の御運動ずきはあまりお烈しいから、日本の皇太子殿下も御運動ずきでいらせられるとは承つたが、あのお相手ではきつとお困り遊ばすかも知れない」と云ふ御言葉があつたと云ふ事で、其の外にも皇太子殿下の御噂は至る所のあらゆる人々に依つて美しく傳へられたのであつた。

(溝口白羊——東宮御渡歐記)

二 舊世界から新世界へ

パリの都を去つたのは九月廿二日。日影爽かに、朝風涼し

九月二十二日
大正八年、西
曆千九百十九

セイヌ河
部から發し、
北西に流れ、
パリを貫いて、
イギリス海峡
にそそぐ

い中に、暫く住みなれたセイヌ河畔の居を辭する時、家僕は、此の次また何時逢へるか、愁を帯びて送つてくれた。こちらは故國へ歸る旅出の悦に充ちても、亦庭に繁つてゐる木、家の前を流れる河、河向ふの丘、何れも半年の親みを重ねた天地に別れる哀を覚えざるを得ない。車はパリの町々を通り過ぎる。大路、小路の並木は黄ばみ落ちて、秋の色は稍、古い町々の人通も寂しげであるが、コンコードの廣場に迸る噴水は、勇ましげに日光に白く輝いて居る。春の初、此の地に着いた時、さては春から夏にかけて、世界各國の人々が種々の顔色や制服で、此の廣場の往來に充満して居たのも、今は昔の夢となつて、四方の石像のみ、淋

しげに立並ぶ。思へば、今やこのパリの都を辭して去らうとする身である。古い歴史は云はずとも、此の年の初め半年の間、此の都は實に世界の中心、萬國の縮圖となつて、其の間に大戦の跡始末は議せられ、古來、哲人が夢想した國際的聯合も、形だけなりとも、此の都で成立つたのである。今年の春から夏にかけて、世界諸方面の利害要求、思想、希望、熱情、空想、さては、批評、攻撃、論難、冷笑など、あらゆる動搖は渦巻の如く、此の都に押寄せ、此等を代表する政治家、軍人、思想家、宗敎家、乃至運動者は、あらゆる人種、國民階級を表現して、千差萬別の姿を此の都に見せた。軍服、制服のあらゆる色彩と共に、都大路を往來する車には、世界中の國旗が翻り、其の中

には革命を経たドイツの新國旗も見えた。其の間に研究、商議、討論も行はれ、ば、動搖、運動、煽動も現はれ、感激と冷罵、狂熱と打算、得意と失望、喜悅と憤慨、妥協と強壓、要請と峻拒、あらゆる混亂、錯雜、或は衝突、或は調和、或は破裂、或は一致が、諸方面に活躍し、飛動し、入亂れ、立替つて現はれた。四年間、戰場に現はれた千差萬別の畫策、活動、戰鬥等も、勿論想像も及ばない錯雜を呈したには違ひないが、此の半年の間に、此の都に起つた喜劇、悲劇、あらゆる活劇の深く且複雑なものには及ばなかつたであらう。然し其等の混雜、複雑の生活も、今は殆ど過去の夢となつた。此等活劇の結果は、遠く世界に波動を及ぼし、種々の難問を各國民に與へるには違ひな

いが、而も其の波動の中心、問題の源泉となつたパリの都は、今や元の靜かなパリとなり、秋の日影暖かなる中に、冷風は、セイヌ河邊の並木を吹いて遊子の心を動かす。世界の文明、人生の活劇が、今や其の幕を改めんとして居るしるしは、秋風のパリに現れ、而して自分は大西洋を渡る爲に、パリの都を去りつゝあるのである。過ぎにし半年、實に世界の中心となり、文明の轉機を畫する大運動の集まつたパリの半年を回想しつゝ、自分は車を驅つてステーションに向ふ。之から自分の旅路は、舊世界から新世界に向ふが、此の半年間のパリは、又實に十九世紀文明の總勘定を持寄つて、そこで廿世紀の世界をどうするかといふ運命を決すべき舞臺

五十年前云
西紀一八七
年の普佛戰
の講和條約が
ヴェルサイユ
で行はれたこ
とをさす
ヴェルサイ
ユ
フランスのゼ
ーヌ、エ、ウア
ーヌ州首都
パリの西南鐵
路十一哩
ライン
スキツルの山
地から發し、
ドイツ西方を
流れオランダ
に入つて海に
注ぐ

となつたのである。五十年前のパリとヴェルサイユとは、フランスとドイツの興敗を決したに過ぎないが、今年のパリとヴェルサイユとは、實に世界の運命、新舊文明の興敗を決すべき要衝に當つた。市中には、尙巨砲ベルタや飛行船から來た彈痕を示して居るが、ドイツ軍は終に、彼等のあせりがかれたパリ入を遂げずに、ラインの彼方に敗退した。之が啻に勝敗の決となつたのみならず、實に文明進展の運命を決して、ドイツの權力主義と、それが含蓄する一切の精神は癒すべからざる創痕を受けた。そこで之に代るべき、相互扶助の社會、民族と個人との自決自主の文明、國際調和の新氣運、これらが果して一九一九年のパリで十分保障を

得たか。問題は茲に横はる。然し、パリの都が此の半年の間に、此の問題の中心となつた事實は、千古の歴史に磨滅すべからざる印象を残した。而して、自分は、その間フランスの最高學院に、日本宗教の精神を講演すると共に、此の如き重大の意味ある活劇のパリに生息して、其の光景を目に見、其の空氣を心に吸ひ得た。親友ガルニエ一人に送られて列車に乗込む。汽車は動き出した。而してセイヌの河を渡つて、パリの面影が林野のあなたに隠れた時、一九一九年のパリは、自分の心に其の姿を印して、永遠に過去といふ幕に閉ぢられた。

(姉崎正治——社會の動搖と精神的覺醒)

姉崎正治
號は朝風
文學博士、東京
帝國大學文學
部教授

三 晴れわたりたる空のもと

晴れわたる 空のもと

林には 鳥啼けり

けふもまた あはれ鳥

何啼くや ほがら音に

鬱憂に 歡喜に

われは聽く 汝が聲を

しかはあれ 永劫に

かゝはらぬ 生死よ

汝が心 我が心

とこしへに かよはねど

かよふなき よろこびに

あゝわれら 生きてあり

あゝわれら よろこびに

生きて啼き 生きて聽く

三木露風
歌人、新體詩
をよくす

晴れわたる 空のもと
明日もまた かくあらむ

(三木露風——露風集)

四 新院御經沈

新院 崇徳上皇、第七十五代、保元元年重祚を謀り、兵を挙げて白河殿に遷り、及んで讃岐に幸せらるる(一七七八—一八二三)八月十日(保元元年)八月十日(八二六)松山 讃岐國綾歌郡直島 讃岐國香川郡の海上に在る

さる程に新院は八月十五日御下着の由、國より御請文到來す。此の程は松山に御座ありけるが、國司既に直島といふ處に御所を造り出だされければ、それに遷らせおはします。四方の築垣つき、唯口一つあけて、日に三度の供御參らす外は、言問ひ奉る人もなし。さらでだに習はぬ鄙の御すまひは悲しきに、秋もやうく、闌けゆくまゝに、松を拂ふ嵐の音、叢によわる蟲の聲も心ぼそく、夜の雁の遙に海を過ぐる

先院 鳥羽皇法
金谷 晋の石莊の別荘
南樓 秋夜月明の時に宴を開くを南樓の會といふ
烏の頭白く 燕丹求、歸、秦玉白、烏頭白、馬生、角、乃許、耳、丹乃仰、天、歎、烏頭即白、馬亦生、角、(史記)
五部の大乘 經 華嚴經・大集經・大品般若經・法華經・涅槃經

も、故郷にことづてせまほしく、曉の千鳥の洲崎にさわぐも、御心を碎く種となる。我が身の御歎よりは、僅かに付き奉り給へる女房達の伏沈み給ふに、彌、御心苦しかりけり。朕遙に神裔を受けて天子の位を踐み、太上天皇の尊號を蒙りて、粉榆の居をしめき。先院御在世の間なりしかば、萬機の政を心に任せずといへども、久しく仙洞の樂みに誇りき。思出なきにあらず、或は金谷の花を翫び、或は南樓の月に吟じ、既に三十八年を送れり。如何なる前世の宿業にか、斯かる歎に沈むらむ。たとひ烏の頭白くなるとも、歸京の期を知らず、定めて望郷の鬼とぞならむ。偏に後世の御ため、とて、五部の大乘經を三年が程に御自筆に遊ばして、貝

八幡山山城國綴喜郡
高野山紀伊國伊都郡

鳥羽山城國紀伊郡

平治元年二條天皇の年
號(一八一
九)

仁和寺眞言宗御室派
の大本山、山
城國葛野郡花
園村

御室仁和寺の門
主、即ち聖性
法親王。鳥羽
院の第五の宮

關白藤原忠通
主上
二條天皇

鐘の音も聞えぬ處に置き奉らむも不便なり、八幡山か高野
山か、若し御許あらば、鳥羽の安樂壽院の御墓に置き奉りた
き由、平治元年春の頃、仁和寺の御室へ申させ給ひしかば、五
の宮よりも關白殿へ此の由傳へ申させ給ふ。殿下より能
き様に執り申させ給へども、主上終に御許されもなくして、
この御經を即ちかへし遣さる。御室より、御とがめ重くお
はします故、御手蹟なりとも都近く置かれ難き申承り候間、
力及はず」と御返事ありければ、法皇この由聞し召して、「口惜
しきことかな。我が朝にも限らず、天竺震旦にも、國を論じ
位を争ひて、伯父姪謀叛を起し、兄弟合戦を致す事なきにあ
らず。我この事を悔い思ひ、惡心懺悔の爲に此の經を書き

康賴平氏

長寛二年二條天皇の年
號(一一八二四)

志度讃岐國大川郡

白峰讃岐國綾歌郡
松山村

奉る所なり。然るに筆蹟をだに都に置かざる程の儀に至
りては力なし。この經を魔道に回向して、魔縁となりて遺
恨を散ぜん」と仰せければ、此のよし都へ聞えて、「御有様見て
參れ」とて康賴を御使に下されけるが、まゐりて見奉れば、柿
の御衣のすゝけたるに長頭巾をまきて、大乘經の奥に御誓
狀を遊ばして、千尋の底に沈め給ふ。この後は御爪をも削
らず、御髪をも剃らせ給はで御姿をやつし、惡念に沈み給ひ
けるこそ恐ろしけれ。かくて九年おはしまして、長寛二年
八月二十六日、御歳四十六にて志度といふ處にてかくれさ
せ給ひけるを、白峰といふ處にて烟になし奉る。
仁安三年の冬の頃、西行法師諸國修行のついでに、白峰の御

仁安
六條天皇の年
號(一八二六)
一八二八

西行法師
源平時代の歌
僧。俗名佐藤
義清(一七五
八)一八五

治承
高倉天皇の年
號(一八四〇)
一八三七

頭殿

左馬頭源義
朝。義朝は保
元。亂の折に
は下野守たり
し。故に平治
亂の時、治殿
進し。左馬頭
たりし。故に
殿と書いた

二十九日
平治元年十二
月

長田莊司忠
致

鎌田正家の妻
の父

墓に参りてつくくと見参らせ昔の御事思ひ出し奉りて、
かくぞ詠み侍りける。

よしや君むかしの玉の床とても

かゝらむ後はなににかはせむ

治承元年六月二十九日、追號ありて崇徳院とぞ申しける。

(保元物語)

五 義朝野間下向

頭殿には同じき二十九日に、尾張國知多郡野間の内海に着
き給ふ。長田莊司忠致うけ取り奉りて、様々にもてなし申
せども、御馬をまゐらせよ、急ぎ御通りあるべし」と宣ひけれ

ば、せめて三日の御祝過ぎてこそ御立ち候べけれ」とて、頻に
留め奉れば、力なく逗留し給ふ。

さる程に長田莊司、子息先生景致をちかづけて、さても此の
殿をば通しや奉る、これにて撃ち申すべきか、如何に」といふ
に、影致申しけるは、「東國へ下りたまふとも、人よも助けまゐ
らせじ。人の功名になさむよりも、これにて討ち奉りて平
家の見参に入れ、義朝の知行分をも申したまはらば、子孫繁
昌にてこそ候はむずれ」といひければ、尤も然るべし。たゞ
し名將の御事なれば、小勢なりとも討ち奉らむこと大事な
り」と申せば、「御湯ひかせたまへとて湯殿へ賺し入れ奉りて、
橘七五郎は近國に無雙の大力なれば、組手なるべし、彌七兵

玄光法師
義朝の妾延壽の母大炊の弟美濃國の住人にて、東國の義朝に從つた

正月三日
平治二年

衛濱田三郎は手利なれば刺し殺し參らすべし。鎌田をば内へ召されて、酒を強ひふせ軍の様を問ひ給へ。頭殿撃たれ給ひぬと聞きて走り出でば、妻戸の陰に待ちかけて景致斬りふせ候はむ。金王丸と玄光法師をば遠侍にて若者どもの中に取りこめ、引つ張りて刺し殺し候はむに何の仔細候べき。と計らへば、湯殿しつらひて、正月三日に莊司御前にまゐり、都の合戦道すがらの御辛勞に御湯召され候へ。と申せば、然るべし。とて、やがて湯殿へ入りたまへば、三人の者隙を窺ふに、金王丸御劔を持ちて御垢に參りければ、すべて討つべき様ぞなき。程經て、御帷子まゐらせよ。といへども、人もなき間、金王丸腹をたて走り出でける其の際に、三人の者

走り違ひてつと入り、橋七五郎ちはずと組み奉れば、心得たり。とて取つて引寄せ押伏せ給ふ所を、二人の者ども左右より寄りて、脇の下を二刀づゝ刺し奉れば、心は猛しと申せども、鎌田はなきか、金王丸は。とて、終に空しくなりたまふ。金王丸走り歸りてこれを見て、悪い奴ばら、一人もあますまじ。とて、三人ながら湯殿の口に斬りふせたり。鎌田兵衛は忠致に向ひて酒を飲みけるが、此の由を聞きて突い立つ所を、酌取りける男、刀を抜いて飛びかゝる。正家取つて引寄せ、其の刀を以て二刀刺す所を、後より景致も。と首を撃ちて打落す。鎌田も今年三十八、頭殿と同年にて失せにけり。玄光法師は頭殿討たれ給ひぬと聞きて、これは鎌田が業にてぞ

鷺栖
郡美濃國養老

あるらむまづ正家を討たむ」とて、薙刀持ちて走りまはりけるが、鎌田もはや討たれぬと聞きて、さらば長田めを討たばや」とて、金王丸と二人面も振らず斬つてまはり、數多の敵斬りふせて、塗籠の口まで攻入りけれども、美濃・尾張の習、用心厳しき故に、帳臺の構したゝかに拵へたれば、力なく長田父子をば撃ち得ずして、馬屋に走り入り、馬引出し打乗り、留めむとおもはゞ留めよ」と呼びけれども、遠矢少々射懸けたるばかりにて、近づくものなかりしかば、玄光は鷺栖に留り、金王丸は都へ上りけり。鎌田が妻女これを聞き、討たれし處に尋ね行き、われは女の身なれども、全く二心は無きものを、いかに恨めしく思ひたまふらむ。親子の中と申せども、わ

れもさこそ思ひ侍れ。飽かぬ中には今日既に別れぬ。情なき親に添ふならば、又も憂目や見むずらむ。おなじ道に具したまへ」とて、しばしは泣き居たりけるが、夫の刀を抜く儘に胸元に差當て、うつぶし様に伏しければ、貫かれてぞ失せにける。忠致、左馬頭を討ち奉ることは喜なれども、最愛の女を殺し歎にこそ沈みけれ。景致、頭殿の御首並に鎌田が首を取り、死骸どもをば一つ穴に掘り埋む。いかに勳功を望めばとて、相傳の主を討ち、現在の塔を害しける忠致が所存をば、悪まぬものもなかりけり。

(平治物語)

六 徒然草抄

垂れ籠めて
古今集に
一たれこめて
春のゆくへも
知らぬまに待
ちし櫻もうつ
ろひにけり

(一) 花はさかりに

花はさかりに月は限なきをのみ見るものかは。雨に對ひて月を戀ひ、垂れこめて春のゆくへ知らぬも、猶あはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散り萎れたる庭などこそ見所おほけれ。歌の詞書にも、花見にまかれりけるには、やく散りすぎにければ、ともさはることありてまからで、なども書けるは、花を見て「といへるにおとれることかは。花の散り月の傾くを慕ふならひはさることなれど、殊にかたくななる人ぞ、此の枝かの枝散りにけり、いまは見所なし」などはいふめる。よろづのことも始め終りこそをかしけれ。望月の限なきを千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなり

栗栖野
山城の國 醍醐
のほとり

て待ちいでたるが、いと心深う青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたる叢雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴、白檜などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都戀しう覺ゆれ。すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ちさらでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

(二) かくてもあられけるよ

神無月のころ栗栖野といふ所をすぎて、ある山里にたづね入ること侍りしに、遙かなる苔の細道ふみ分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋るゝ笥の雫ならでは、つゆ

音なふものなし。關伽棚に菊紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよとあはれに見る程に、彼方の庭に大いなる柑子の木の枝もたわゝになりたるが、まはりを厳しくかこひたりしこそ少しことさめて、此の木なからましかばと覺えしか。

(三) 飛鳥川の淵瀬

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、樂しび悲しびゆきかひて、はなやかなりしあたりも人すまぬのらとなり、かはらぬすみかは人あらたまりぬ。桃李ものいはねば、たれとともにか昔をかたらむ。まして見ぬいにしへのやむごとなかりけむ跡のみぞいとかなき。

飛鳥川 大和國高市郡磯山初瀬川に合す。古今集に「昔の飛鳥川は今日も瀬の淵となり」と讀人不知。桃李云々 幾許誰栖 (管三品)

(四) よろづの道の人

よろづの道の人、たとひ不堪なりとも、堪能の非家の人に並ぶ時、必ずまさはることは、たゆみなく慎みてかるくしくせぬと、偏に自由なるとの等しからぬなり。藝能所作のみにあらず、大方の振舞心づかひも、おろかにして慎めるは得の本なり、巧にしてほしきまゝなるは失の本なり。

(五) 一道にたづさはる人

一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろに臨みて、あはれ我が道ならましかば、かく餘所に見はべらじものを、といひ、心にも思へること常のことなれど、よにわろくおぼゆるなり。知らぬ道のうらやましく覺えば、あなうらやまし、などか習

はざりけむ」といひてありなむ。わが智をとり出で、人に争ふは角あるもの、角をかたぶけ、牙あるもの、牙をかみいだすたぐひなり。人としては善に誇らず物と争はざるを徳とす。他に勝る事のあるは大いなる失なり。品の高さにて、才藝の優れたるにても、先祖の譽にても、人に勝れりと思へる人は、たとひ詞に出で、こそいはねども、内心にそこばくの咎あり、慎みてこれを忘るべし。をこにも見え、人にもいひ消たれ、禍をも招くは只この慢心なり。一道にも誠に長じぬる人は、みづから明かに其の非を知る故に、志常に満たずして、遂に物に誇ることをなし。

(六) 心に主あらましかば

主ある家には、すゝるなる人こゝろの儘に入りくる事なし。主なきところには、道行き人みだりにたち入り、狐臬やうのものも人けにせかれねば、ところえがほに入りすみ、こだまなど云ふけしからぬ形もあらはるゝものなり。我らが心に、念々のほしきまゝに來り浮ぶも、心といふものゝなきにやあらむ。心にぬしあらましかば、胸の中にそこばくのことは入り來らざらまし。

(七) 大臣の大饗

大臣の大饗はさるべき所を申しうけて行ふ、常のことなり。宇治左大臣殿は東三條殿に行はる。内裏にてありけるを申されけるによりて他所へ行幸ありけり。させる事の上

大饗 王朝時代に行
はれ、大饗大宴
二宮大饗大宴
あり、大饗大宴
饗は、大饗大宴
の時は、大饗大宴
以下、諸大臣命
招きて饗應す
宇治左大臣
長久藤原頼
左大臣、同
一〇八〇年
一〇八〇年

せなければ、女院の御所などかり申す故實なりとぞ

(八) 人の田を論ずるもの

人の田を論ずるもの、訟にまけて妬さに、其の田を刈りて取れ。とて人を遣しけるに、まづ道すがらの田をさへ刈りもて行くを、これは論じ給ふ所にあらず、如何にかくは。と云ひければ、刈る者ども、其のところとても刈るべきことわりなれども、僻事せむとてまかるものなれば、いづくをか刈らざらむ。とぞいひける。ことわりいとをかしかりけり。

(九) 同じ心ならむ人と

おなじ心ならむ人としめやかに物語して、をかしきことも世のはかなきことも、うらなくいひ慰まむこそうれしかる

べきに、さる人あるまじければ、露たがはざらむと對ひあたらむは、ひとりある心地やせむ。互にいはむほどのことをば、げにと聞くかひあるものから、いさゝかはたがふ所もあらむ人こそ、我はさやはおもふ。など争ひにくみ、さるからさぞ。ともうちかたらは、つれづれなくさまめとおもへど、げには少しかこつ方も。我と等しからざらむ人は、大方のよしなしごといはむほどこそあらめ、まめやかかの心の友には、廻かに隔たる所のありぬべきぞわびしきや。

(十) 人の物を問ひたるに

人の物を問ひたるに、知らずしもあらじ、ありのまゝにいはむはをこがましとにや、心まどはすやうにかへりごとした

る善からぬことなり。知りたることも猶さだかにと思ひてや問ふらむ。又まことに知らぬこともなか無からむ。うらゝかに云ひ聞かせたらむは、おとなしくきこえなまし。人はいまだ聞及ばぬことを我が知りたるまゝに、さても其の人のことのあるに、かとお押しかへし問ひに遣るこそ心づきなけれ。世に舊りぬることをも、おのづから聞きもらすあたりもあれば、覺束なからぬやうに告げやりたらむ、悪しかるべきことは。かやうのことは物馴れぬ人のあることなり。

(土) 恩愛の道

心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。あるあらえびすのおそろしげなるが、かたへにあひて、御子はおはすや」と問ひしに、「一人も持ちはべらす」と答へしかば、「さてはものゝあはれは知りたまはじ、情なき御心にぞものしたまふらむといとおそろし。子ゆゑにこそよろづのあはれはおもひ知らるれ」といひたりし、さもありぬべきことなり。恩愛の道ならでは、かゝるものゝ心に慈悲ありなむや。孝養の心なきものも、子もちてこそ親の志は思ひ知るなれ。

(三) 人のなきあと

人のなきあとばかり悲しきはなし。中陰のほど山里などにうつろひて、たよりあしく狭き所にあまたあひみて、後の

わざども營みあへる、心あわたし。日數の早く過ぐるほどぞものにも似ぬ。はての日はいとなさけなう、互にいふこともなく、われかしこげにも引きしたゝめ、ちりゝに行きあかれぬ。もとの住家に歸りてぞ、更に悲しきことは多かるべき。「しかど」のことは、あなかしこ、後のため忌むなることぞ。などいへるこそ、かばかりの中に何かはと人の心はなほうたて覺ゆれ。

去るものは
云々
文選に「去者
日已疎、來者
日已親」

年月経てもつゆ忘るゝにはあらねど、去るものは日々引としといへることなれば、さはいへど、其のきはばかりは覺えぬにや、よしなしごとなどいひてうちも笑ひぬ。
骸はけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつ

年々の云々
白氏文集に
「古墓何代人、
不知姓名、路傍
名化爲路傍
生、年々春草
生」
薪に摧かれ
交選に「世に郭
門、直視、但見
丘、與、墳、古、松
壘、爲、薪」

京囚
安政の大獄
勤王の志士が
捕へられて江

つ見れば、程なく卒都婆も苔蒸し、木の葉降りうづみて、夕の嵐よるの月のみぞ、言問ふよすがなりける。思ひ出でしのぶ人あらむほどこそあらめ、そもまた程なく失せて、聞傳ふるばかりの末々は哀とやは思ふ。さるはあととふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず。年々の春の草のみぞ、心あらむ人は哀と見るべきを、はては嵐に咽びし松も、千歳を待たで薪に摧かれ、古きつかは鋤かれて田となりぬ。そのかただに無くなりぬるぞ悲しき。

七 京囚江戸送 (自修文)

品川の宿外れ、一面に黒幕を張りつめたやうな空に、星影が寒く慄へてゐ

戸に送られることになつた。この人々を京囚といつたのである。

梅田源次郎 京都の儒者、勤王家、號を雲濱といふ。安政五年幕府に捕へられ、六年四月獄死。四十四歳。
頼三樹三郎 頼山陽の第三子、京都の儒者、勤王家、安政五年幕府に捕へられ、六年三月斬られた。三十五歳。

吉田松陰 長州藩士、勤王家、安政五年捕へられ、六年十月斬られた。三十九歳。
村岡刀自 京都の人、近衛家に仕へ、國近衛家、盡力した。明治六年八月八歳で歿。
鶴飼吉左衛門 水戸藩士、子の幸吉と共に、勤王に盡した。安政六年八月斬られた。
小林民部 鷹司家の世臣、此の時捕へられ、一月獄死。池田大學の一人。
浮田一蕙 京都の畫家、勤王家、安政六年釋され、同年病死。六十五歳。
橋本左内 福井藩士、勤王家、安政六年十月幕府に斬られた。

る。上手の松並木が夜風にざわめいてゐる。海の遠鳴りも聞える。覆面した怪しい風體の武士が五六人、そこへ來かゝつて、互に囁き合ひながら、腰の刀に手をかけて、彼方此方見廻はし、何物かを待構へる様子。甲「あれ、あれ、あの提灯の火がそれらしい。ぬかつてはならんぞ。」乙「いや、あれは唯の通行人かも知れぬ。逸まつてあやまちをしてはならんが、それにしても、もうやがてこゝへ來かゝる刻限には相違ない。」丙「綱乗物が先で、唐丸籠が後から來るのだらうな。此方はその唐丸籠の梅田源次郎先生、頼三樹三郎先生、吉田松陰先生だけでもお救ひする事が出來れば、せめてもの本望ぢや。」丁「いや、綱乗物にも大切な方々がゐられる。女ながら有髯男子も及ばぬ近衛家の老女、村岡刀自を見殺しには出來ぬ。それに鶴飼吉左衛門父子は是非共救ひ出さねば濟まないのぢや、京都からの勅書を水戸家へ持込んだ手柄のある大忠臣ではないか。」戊「いや、小林民部、金田伊織、池田大學、浮田一蕙、その他の方々も皆京都表で、

尊王攘夷の爲に水火を踏んで、身命を惜まざつた御人たちぢや、それが奸賊のために珠數つなぎにされて、屠所の羊のやうに江戸表へ引出される今日のみじめな淺ましい生葬ひの行列を、をめぐり見過しに出來ようか。警固の武士を片つ端から斬捨て、残らず助け出さねば我々の面目は立たん。甲「いや、御尤も千萬なお言葉ぢや。こゝで、梅田、頼、吉田諸先生方始め、一同をお助けして、その上、江戸表で召捕になつた橋本左内先生を我が黨の手に奪ひ返したら、尊王攘夷の旗風は再び天下を吹靡かさう、その機會を外さず、赤鬼方へ一發打ちこんで、首を上げて了へば、もう占めたものぢや、我が國土を汚す豚同前な夷狄は残らず血祭にしてのけ世を天朝の御代にするのぢや……提灯の火がだん／＼近寄つて來るぞ。」乙「ではこゝらで待伏の用意をせうか。我々の刀の切味一つが、我が日本國を生かすか殺すか、大切などたん場ぢや。仕損ぜぬやうに覺悟をきめてかゝらねばならぬ。」

赤鬼
井伊直弼のこと

西萬一武運拙く仕損じたら、潔く切死するか、後に生證據を殘さぬといふ約束は堅く守らねばなるまい。」

一同「それは一同、百も承知ぢや。」

（皆々拔刀する）

（編笠に小提灯の武士忙しく駈來る）「正か。」

一同「堂。」

金子孫次郎
水戸藩士、後
に櫻田門外で
井伊直弼を斬
つた浪士の一人

金子「あゝよく間に逢つた、金子ぢや、孫次郎ぢや、あれほど逸まつてはならぬ、今輕々しく手出しする時ではないと、割つ、碎いつ、云つたのを、君方は表面で承知したと見せかけながら、そつと、拔出して來られたな。武士に二言は無い筈ぢやが。こゝではまあ何も云ふまい。唯引返されたい。黙つて、このまゝ引返しなされい。孫次郎が頼むのぢや。」

甲「いかにも、我々一黨が、ぬけ出して參りましたのは重々惡うございますが、どう考へ直しましても、尊王攘夷の爲に、あれだけ粉骨碎身した天下の志士等を、めくく奸黨の役人輩の汚れた手に渡すのは殘念千萬で、

我々若い者の體中の血は沸立ちます。意氣地なく見殺しには出來ません。どうしてもこゝで奪ひ取るより他に途も法もありませんからどうぞ御見のがし下さいませ。」

一同「何卒、このまゝ御見のがしを願ひます。」

金子「君方は、小事のために、大事を破つても差支ないと思はれますか。この金子が薩摩の西郷や大久保としめし合せてゐる一大事が、こんな輕々しい一舉の爲めに覆される破目に陥つてもお構ひない氣か。いかに警固の武士が、うつけでも、五人や七人で切倒される程腑甲斐ない者の揃ひとも思はれますまい。さすれば君方は皆好んで、犬死をせられるのぢや。犬死をするのは、今の若い武士の面目かな。さうではあるまい。さあこの金子に黙つてついて來られい。捨てたい生命を暫時預けられい。どうぞぢや。」

（一同もぢくする）（向ふから提灯の火影がちらちら見える）（浪人等はそれを認めて、互に頷き合ひ、直ぐ隠れてしまふ）

〔排雲手欲拂妖熒失脚踏來江戸城井底痴蛙過憂慮天邊大月缺高明〕
 ……詩吟の聲聞ゆ。唐丸籠が先に、網乗物が後から、幾つもくつとく。警固の武士數十人御用提灯をふりかざし武器を手にして、前後左右を固めてゐる。〔詩吟の聲の聞えてゐた唐丸籠の、五寸の窓から頼三樹三郎が顔を出す〕

頼 役人一寸待て、一寸待つてくれ。

役人 何用でせう。

頼 もう江戸も直ぢやな。愈江戸へ入るのぢやな。

役人 左様もうぢきだから、どうぞ詩吟などは止めて下さい。道中は萬事、大目に見て居りましたが、もうお膝元も真近になつたから、これからは式の通り、嚴重にしないと、我々の役目も越度になります。何卒左様心得て下さい。

頼 然うか、もう江戸が近いから今まで通り寛大の處置は出来んといふのか。それも尤ぢやが、先刻からしきりに喉がかわくから、頼三樹三郎に

もう一杯末期の酒を飲ませてくれ。もうこれぎりぢや。末期の酒を飲ませてくれ。

役人 あなたは一日に三升もおあがりです。今日はもつと多量に入つておませう。それでもまだ欲しいのですか。

頼 この頼は、酒に量無しぢや。三升でも五升でも構はぬぢやあないか。もつと持つて来てくれ。

役人 ちよつと上役に伺ひます。(上役人の所へ走つて行く)

頼 勘定を拂はない振舞酒に有附くのは、得のやうでやつぱり損か。向ふは掛代金を首で取らうといふのだからな。ハ、ハ、ハ、ハ。

役人 (戻つて) では道中はこれ限りといふお許しが出ました。(駕籠側に附けた樽を卸して飲ませる)

頼 ふむ…美祿美祿…時に、この上にも一つ願がある。隣の籠の梅田源二郎殿、その先の吉田寅二郎殿へ、頼が訣別の杯がしたい。老女村岡刀自始め、一人一人さしたいのぢやが、酒が足るまい。で、せめて、梅田吉

田の兩所へだけでもさうしたい。何卒それを取計らうてくれ。頼が一生の頼みぢや。」

役人「それは御無用です。」

頼「私が其の方に頭を下げて頼むのぢや。」

役人「いくら頼みになつても、いけません。」

頼「怒つた聲」上役を呼べ。」

上役人「何卒お静かに願ひます。もう江戸城も間近になりました。我々、役目の手前、お咎を受けるやうな事があつてはなりません。」

頼「さうでもあらうが、五十三次と一緒に道連で、長の旅をして來ながら、ゆつくり話も出來ず、顔も見られぬ。生死を一時にと誓つた友達同士が、これではあまり情ないではないか。せめて訣別の杯位させてくれ、ても善い筈ぢや。汝等もまさか涙のない鬼畜ではあるまい。」

上役人「公儀の御沙汰でございます。御定法を曲げる事は成りませぬ。」

頼「訣別の杯もさせない……それが公儀の沙汰ぢやと、定法ぢやと……ふ

ん、今に見ろ、その公儀の沙汰が、鑑一文にも通用しなくならう、幕府も滅びる時が來てゐるのぢや。我々が皆自由に思ふ所を言ひ、自由に欲する所を行はうとするのを、權威を笠に、力づくで、搦め取つて繩をかけて仕置場へ引ずつて行く。豚羊同前の夷狄の奴輩には、祟を恐れて、さはらぬ神様扱にしながら、同じ日本に産れた同胞を、逆さまに豚羊扱ひにするこの亂暴狼藉が、人を怒らせ、天を怒らせずに済むものか。今日江戸へ送られて行く天下の志士の、一人一人の首が飛んだら、その一々の疵口から血の洪水が全國に溢れ出すと思へ。今に見て居れ。この獄卒め等が……」

(松並木の蔭より跳り出でんと逸る人々を金子が制してゐる)

梅田「暇乞の杯はいらぬ。梅田はまだ生きてゐる。」

吉田「寅二郎も無事ぢや。」

役人「しつ……しつ。御話はなりません。」

上役人「さあ、行かう。」

頼「私もまだ生きてゐる。聲がかたみぢや。」

村岡「えへん、えへん」と咳く

(前後の籠から「えへん……えへん……」と咳が起る)

頼「あゝ皆無事か……私はもう今から辭世の詩を作つて置く……今の後を歌ふぞ……身臨湯鑊家無信夢斬鯨鯢劍有聲風雨多年苔石表誰題日本古狂生」

(一列はやがて入つて行く)

(松並木から一同出て來る)

金子「眼を拭いて我々が此處に忍んでゐるようとは夢にも思はれなかつたであらうが、聲を聞いたのがせめてものかたみぢや……あれだけ國を憂ひ、君を思ふ志士の面々の首が飛んだら、ぼんにその切口から血の洪水が溢れて出て、今幕府に蔓つてゐる奸賊等も我が國を窺ふ夷狄の奴輩も、一度に溺れ死せずにはをられまい。あゝ皆様の御苦衷の程は、金子孫次郎お察し申上げる。(と後影に一禮する)

中村吉藏
號は春雨、文士

一回お助けせぬのは、いかにも残念に思ひますが、大事の前の小事と聞いては、止むを得ません。何卒御許し下さい。今に皆様の仇は屹度取ります。(と遙に禮拜する)

(中村吉藏—伊井大老の死)

八 水鳥の羽音その一

實に身世は奕棋の如し、勝敗常なく、興亡定まらず、淨海入道福原の新都に在り、頼朝兵を起せしと聞くより、憤ること大方ならず、九月四日の夜、新院の御座所に參りて請ひまつる。

「君、御年若く在しませば、定めし知召し給ふまじ。去ぬる年、源爲義、其の子義朝相繼いで法皇に御敵對致し候ひしを、入道謀を以て皆討滅ぼし候ひぬ。義朝が三男に右兵衛佐

淨海入道

平清盛

福原の新都

治承四年六月
から十一月ま
たで帝都であつ

新院

高倉上皇

法皇
後白河法皇

頼朝と申す小倅の候。江州伊吹の麓にて召捕り候ひしを、入道の繼母池尼が様々に嘆きて一命を申請ひて候。入道前に呼寄せて事の様を尋ね問ひ候へば、唯知らずとのみ申し候ひき。十三の少年、知らん道理もあらじと思ひ、申し宥めて伊豆へ流し候ひしに、定めて君にも聞召され給ふらん。此の度謀叛を起し候とぞ承はる。疾く討手を下し候はん。何卒宣旨を下させ給ふべし。」

新院御言葉徐かに宣はす。

「申すものあらねば聞きしは今が始なり。追討は仔細ありとも覺えず。ただ法皇にこそ申すべけれ。」
時に法皇牢の御所に在して政事に關からせ給はず。入道

重ねて申す。

主上
安徳天皇

「主上幼うましく、君は正しき御親にてましまさずや。君を差越え奉りて、何でう法皇に請ひ奉る道理に候べき。それとも平家を憎ませ給ひて、源氏を引かせ給はん思召しにもや候らん。」

入道例のすね言を申せば、新院軽く打笑ませ給ふ。

「又其の様な事を申す。して大將軍は誰ぞ。」

入道申す。

「入道の孫維盛こそ然るべう候へ。」

新院乃ち維盛を以て追討使となし、其の先祖正盛の源義親を討ぜし例に依りて驛鈴を賜ひ、官符を東海・東山の二道に

平正盛 忠
盛清 盛
重盛 維盛
義親
源家の二
男、對馬守と
なる、康和年
間鎮西に横行
して誅せられ

下させ給ふ。

九月二十二日、右近衛權少將維盛、薩摩守忠度、參河守知盛、兵五千餘騎を率ゐて福原を發し、一舉して頼朝を討滅ぼさんと欲す。齋藤實盛嚮導たり。行く／＼兵を收めて駿河に抵る。來り屬するもの五萬餘騎。實盛策を進む。

「武藏相模の勢若し源氏に附かば、一大事に候。疾く／＼足柄を越えて此の二國の勢を收め給ふべし。」

藤原忠清傍より口を開く。

「其は極めて然るべからず。新たに募れる軍勢を率ゐて、深く不知案内の敵地に入るは、以ての外の危道に候なり。」
維盛實にもと思ひて忠清の儀に従ふ。斯くては此の軍勝

藤原忠清
伊勢古市の
人、始め伊藤
五といふ、清
盛に仕へて右
衛門尉とな
り、世の時な
朝に屬して頼

目あらず。實盛心憚らず。維盛進んで富士川に抵れば、源軍既に來りて陣を取る。川の廣さ一丁あまり二丁もあらん。滔々たる濁流瀬を立て、波を立て、下る。東の岸には白旗風に飜り、西の岸には赤旗日に閃めく。兩軍相持して未だ戦はず。

源軍の先鋒安田義定戦を挑む。

「それへ參り候はんか、これへ御渡り候べきか。」

維盛の心未だ決せず。實盛を召して問ふ。

「汝は東國の案内に精し。頼朝の勢に汝ほどの弓勢のどの何程かある。」

實盛膝を進めて説く。

「君、實盛などを好き者と思し給ふか。源氏の勢には弓は三人張五人張、矢は十四束十五束を彎き、一矢にて二人三人を射落し候はんもの、一隊に二十人三十人が程は候はん。人毎に馬五六頭も蓄へて、山坂を驅ること平地に異ならず。父死すれども子退かず、子討たるれども親退かず。屍骸を乗越え、飛越えて、死生知らずに戦ふこそ、實に坂東武者の習に候へ。實盛如きものは何でふ物の數に候はんや。東國の一騎は西國の二十騎三十騎にも當り候はん、まして御味方の五萬餘騎に對して、源軍は二十萬騎にも餘り候はん。若しも前を絶ち、後を塞ぎて中に取込め候はば、御味方一人も遁れ出づること叶ふまじ。誠にゆゝしき大事に候はず

内大臣殿
清盛の二男宗盛

や。實盛内大臣殿の御恩を蒙むること海より深く、山より高し。今生の御名殘に今一度見參に入りて、又こそ參り候はめ。」手勢一千騎を率ゐて京に還る。維盛聞いて意氣俄かに怯む。兩軍尙ほ相持すること數日、前岸を見れば敵勢益加るらし。白旗日に數を増す。

九 水鳥の羽音 その二

實盛の辭し去りてより、忠清代りて先陣に在り。

「實盛なくとも、なか軍の出來ざらん。」

口にこそ言ひはなて、固く兵を勒めて敢て動かず。滯陣久しきに彌れば、士氣漸く弛ぶ。將士甲を脱し、鎧を釋きて、歌

を詠じ酒を傾く。

源軍の兵勢日々に加はる。山の麓川の岸皆兵ならぬはなし。頼朝、二十四日の曉天を以て敵を襲はんとす。陣々皆隊を整へ、營々皆篝火を焚く。

平軍川を隔てて望み見れば火光さながら天を焦さんばかり。

「あれ見よ南北に馳せちがふ燈は、飛びかふ螢の光に似たり。敵は何時押寄せ來らんも知れじ。用意こそ肝要なれ。」亦篝火を焚きて敵に備ふ。

初更を過ぐれども敵動かず、二更を過ぐれどもなほ寄せず、夜色漸く更けゆけば、將士皆とろ／＼とまどろむ。

二十四日
治承四年十月

何の音にやおびえけん、富士沼の一部に群れあたる水鳥ども、忽ちばつと駭き飛ぶ。此の羽音に驚きて、幾十萬羽となき沼一面の水鳥ども亦皆飛ぶ。颯と搏つて上り、颯と搏つて下る羽音、さながら大軍の押寄するに似たり。

「素破や敵軍近く押寄せしぞ。」

寢惚けし平軍の將士、愕然として打驚く。

「疾く逃げよ、叶はじ。」

子は親を棄て、主は家來を捨て、皆我先きにと遁げ走る。

甲は踏まれ、鎧は躪らる。主なき軍馬己がじ、西に、東に、飛ぶ。

斯くとも知らぬ源軍、曉氣を冒して徐かに川を渡り、どつと

喚きて押寄すれば、陣々唯旗のみありて、人は在らず。「こは
こは如何に。」何れも呆れに呆れて言葉も出でず。大將の
陣營を見れば、頭に傷つきて蠢めく一人の女あり。

「何者ぞ、如何にしつる。」

と問へば、これは此のわたりの宿のものにて、

「宵の中は何事も侍らざりしに、夜半ばかりに殿原俄かに
慌てふためきて逃失せたまふ。其の時馬に踏まれて此の
體に侍る。何事の候ひけん、知り侍らねど、唯水鳥の羽音の
み夥しう聞え侍る。」

と問はるゝ儘に答ふれば、

「扱は例よりも羽音の夥しかりしが、あの音に驚きて逃去

りしと覺ゆるぞ。流石は京家の者どもよ。」

源軍思はずどつと笑ひどよめく

其處此處と見廻れば、弓箭甲冑狼藉たるが中に「忠清」と銘書
きたる鎧櫃あり。「武具を捨つるからは、出家遁世して墨染
の衣を着るこそ好けれ。」と一人打笑へば、又一人、

富士川に鎧は捨てつ墨染の

衣たゞきよ後の世のため

と口吟む。一軍聞傳へくゝてまた笑ひさゞめく。捷てる
軍中なべて笑聲多し。

逃ぐるに早き平軍、後れて來るを敵とや思へる、止度もなく
走りくゝて、十一月十五日、京に逃入る。

「軍に向ひては命を失ふところ聞きつれ、一人も缺けて上り給ふこと、實に天晴れ剛の者よ。」
人々皆嘲り笑ふ。

誰が業とは知らず、淨海入道の門の柱に墨くろくと書記す一首の落首、

富士川の瀬々の岩越す水よりも

早くも落つるいせ平氏かな

短氣の入道何かは怵へん。

「維盛奴を鬼界が島に流せよ、忠清奴の首を刎ねよ。」

躍り上り躍り上りて憤る。

傲る平家の運勢今や漸く傾き始めぬ。

熊田葦城
名は宗次郎、
報知新聞記者

(熊田葦城——日本史蹟)

一〇 薩摩守忠度

一 都落

薩摩守忠度
平忠盛の子、
清盛の弟
五條三位
俊成卿
藤原俊成の
子、有名な歌
人、後白河法
皇の勅を奉じ
て千載和歌集
を撰す

薩摩守忠度は、いづくよりか歸られたりけん、侍五騎童一人、我が身ともに混甲七騎とつて返し、五條の三位俊成卿の許におはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず。「忠度」と名乗り給へば、「落人かへり來れり」とて、その内騒ぎあへり。薩摩守急ぎ馬より飛んで下り、自ら高らかに申されけるは、「是は三位殿に申すべき事ありて、忠度が參つて候。たとひ門をばあけられずとも、このきはまで立寄り給へ。申すべき事の候。」と申されたりければ俊成卿、その人ならば苦しかるまじ、

あけて入れ申せ。とて門をあけて對面ありけり。事の體何となう物あはれなり。

薩摩守申されけるは、先年承つてより後は、ゆめく疎略を存ぜずとは申しながら、この二三箇年は、京都の騷國々の亂出で來、剩へ當家の身の上にかかりなりて候へば、常に參り寄る事も能はず。君既に京都を出でさせ給ひぬ。一門の運命今日はやつきはて候。それにつき候ては、撰集の御沙汰有るべき由承つて候ひし程に、生涯の面目に、一首なりとも御恩を蒙らうと存じ候ひつるに、かゝる世の亂出で來て、その沙汰なく候條、たゞ一身の嘆と存候。この後、世靜まつて撰集の御沙汰候はゞ、これに候卷物の中に、さりぬべき歌

君
安徳天皇

候はゞ、一首なりとも御恩を蒙つて、草の陰にても嬉しと存じ候はゞ、遠き御守とこそ成り參らせ候はんずれ。とて、日ごろ詠みおかれたる歌どもの中に、秀歌と覺しきを百餘首書集められたりける卷物を、今はとて打立たれける時、これを取つて立たれたりけるを、鎧の引合より取出でて、俊成卿に奉らる。

三位これを開いて見給ひて、かゝる忘形見どもを賜はり候上は、ゆめく疎略を存じまじう候。さても唯今の御渡こそ、情も深う哀も殊に勝れて感涙抑へ難うこそ候へ。と宣へば、薩摩守、屍を野山に曝さば曝せ、うき名を西海の波に流さば流せ、今は憂世に思ひ置く事なし。さらば暇申す。とて馬

前途程遠云々
前途程遠、馳思於雁山之暮
雲一、後會期遙、霽
纒於鴻臚之曉
源、(和漢朗詠集)

に打乗り胃の緒をしめて、西をさしてぞ歩ませ給ふ。
三位後を遙に見送つて立たれたれば、忠度の聲と覺しくて、
前途程遠、馳思於鴈山夕雲。
と、高らかに口ずさみ給へば、俊成卿もいと哀に覺えて、涙
を抑へて入給ひぬ。

その後世静まつて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし
有様、言ひおきし言の葉、今さら思ひ出でて哀なりけり。件
の卷物の中に、さりぬべき歌いくらもありけれども、その身
勅勤の人なれば、名字をば顯はされず、故郷の花といふ題に
て詠まれたりける歌一首ぞ、
「讀人しらず」と入れられたる。
さゝ浪や志賀の都はあれにしを

昔ながらのやまざくらかな

その身朝敵となりぬる上は仔細に及ばずと云ひながら、恨
めしかりし事どもなり。

二 忠度最期

薩摩守忠度は、西の手の大將軍にておはしけるが、その日の
装束には、紺地の錦の直垂に、黒絲緘の鎧着て、黒き馬の太う
逞しきに、沃懸地の鞍おいて乗り給ひたりけるが、その勢百
騎ばかりが中にうち圍まれて、いとさはがず、控へく落ち
給ふ所に、こゝに武藏の國の住人、岡部の六彌太忠純、よい敵
と目をかけ、鞭鐙をあはせて追つかけ奉り、あれはいかに、よ
き大將軍とこそ見まゐらせて候へ。まさなうも敵に後を

沃懸地
漆塗に金粉又
は銀粉を流し
かけたもの

見せ給ふものかな。かへさせ給へ。」と言葉をかけければ、「これは味方ぞ。」とて、ふり仰のき給ふ内兜を見入れたれば、鐵漿黒なり。「あつばれ、味方に鐵漿つけたるものはなきものを、いかやうにも、これは平家の公達にてこそおはすらめ。」とて、おしならべて、むずと組む。

これを見て、百騎ばかりの兵ども、みな、國々のかり武者なりければ、一騎も落ちあはず、われ先にぞ落行きける。薩摩守は、聞ゆる熊野そだちの大力、究竟の早業にておはしければ、六彌太をつかうで、につくい奴が、味方ぞと云はゞいはせよかし。」とて、六彌太を取つて引きよせ、馬の上にて二刀、おちつく所で一刀三刀までこそ突かれけれ。二刀は鎧の上なれ

ばとほらず、一刀は内兜へつき入れられたりけれども、薄手なれば死なざりけるを取つておさへて首をかゝんとし給ふ所に、六彌太が童、おくれればせに馳せ來て、いそぎ馬より飛んで下り、うち刀をぬいて、薩摩守の右の腕を、臂のもとより、ふつと打落す。薩摩守、今はかうとやおもはれけん、しばし退け。最後の十念となへむ。」とて、六彌太をつかうで、弓だけばかりぞ投退けらる。その後、西にむかひ、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨とのたまひもはてねば、六彌太、うしろより薩摩守の首を取る。よい首討ち奉つたりと思へども、名をば誰とも知らざりけるが、箆に結びつけられたる文を取つて見ければ、旅宿の花といふ題にて、歌をぞ一首よまれ

たる。

「行きくれて木の下陰を宿とせば

花や今宵のあるじならまし

忠度」と書かれたりける故にこそ、薩摩守とは知りてけれ。

やがて首をば太刀の先に貫き、高くさしあげ、大音聲をあげて、此の日ごろ、日本國に鬼神と聞えさせ給ひたる、薩摩守殿をば、武藏の國の住人岡部の六彌太忠純が討ち奉つたるぞや。」と名のつたりければ、敵も味方も、これを聞いて、「あないとほし。武藝にも、歌道にも、すぐれて、よき大將軍にておはしつる人をとて、みな鎧の袖をぞぬらしける。

(平家物語)

七月九日

文治元年

御所

建禮門院の御所當時建禮門院は洛外東山の麓なる吉田の奈良法師の坊に住み給うた

緑衣の監使

緑衣は六位の装束、監使は門卒を云ふ

うき事さかぬ云々
しをりせでなほ山深くわけ入らむうきこと聞かぬとこ(新古今集、西行)

一一 建禮門院の大原入御

去んぬる七月九日の大地震に、築地も崩れ、荒れたる御所も傾き破れて、いとゞ住ませ給ふべき御たよりもなし。緑衣の監使宮門を守るだにもなし。心のまゝに荒れたる籬は繁き野邊よりも露けく、折知り顔にいつしか蟲の聲々恨むるもあはれなり。さるまゝには夜もやうく長くなれば、いとゞ御寢覺がちにて明しかねさせ給ひけり。盡きせぬ御物思に秋のあはれさへ打添ひて、いとゞ忍び難うぞ思召されける。

此の御住居もなほ都近くて、玉鉾の道行き人の人目も繁ければ、露の御命の風を待たむほど、うき事さかぬ深き山の奥

吉田 洛東東山の麓
 小原山 大原を正しとす。山城國愛宕郡
 寂光院 愛宕郡大原村。聖德太子の開基
 女院 高倉天皇の中宮。安徳天皇の生母。平清盛の女徳子
 山里は云々 山里は物のさびしきことこそあれ世のうきよりは住みよかりけり
 (古今集)
 文治元年 後鳥羽天皇の年號(一八四五)

の奥へも入りなばやとおぼしめされけれども、さるべき便もましまさず。ある女房の吉田に參つて申しけるは、「これより北、小原山の奥、寂光院と申すところこそ靜にさぶらへ」とぞ申しける。女院、山里はものゝざびしきことこそあんなれども、世のうきよりは住みよかなるものを。とて、おぼしめし立たせ給ひけり。
 文治元年長月の末に、かの寂光院へ入らせおはします。道すがらも四方の梢の色々なるを御覽じ過ぎさせ給ふほどに、山陰なればにや、日もやうく暮れかゝりぬ。野寺の鐘の入相の聲すごく、分くる草葉の露しげみ、いとゞ御袖ぬれまさり、嵐はげしく木の葉みだりがはし。空かきくもり何

天子 安徳天皇を指す
 一門 平家を指す
 先帝 安徳天皇

時しかうちしぐれつゝ、鹿の音かすかにおとづれて、蟲の恨もたえくゝなり。とにかくにとりあつめたる御心細さ、たとへやるべき方もなし。浦づたひ島づたひせしかども、さすが斯くはなかりしものをとおぼしめすこそ悲しけれ。岩に苔むしてさびたる處なれば、住まゝほしくぞおぼしめす。露結ぶ庭の萩原霜がれて、籬の菊のかれくゝにうつろふ色を御覽じて、御身の上とやおぼしけむ。佛の御前へ參らせ給ひて、天子聖靈成道正覺、一門亡魂頓證菩提と祈り申させ給ひけり。いつの世にも忘れ難きは先帝の御面影、ひしと御身に添ひて、如何ならむ世にも忘るべしともおぼしめさず。

大納言の佐
の局
平重衡の夫人

さて寂光院の傍に方丈なる御庵室を結んで、一間をば佛所に定め、一間をば御寢所にしつらひ、晝夜朝夕の御勤、長時不斷の御念佛怠ることなくして、月日を送らせ給ひけれ。かくて神無月中の五日の暮れ方に、庭に散りしく檜の葉をもの踏鳴らしきてきこえければ、女院「世を厭ふ所に何ものゝ訪ひ來るやらむ。あれ見よや、忍ぶべきものならばいそぎ忍ばむ」とて見せらるゝに、小鹿のとほるにてぞありける。女院「さていかにや、いかに」と仰せければ、大納言の佐の局涙をおさへて、

岩根ふみ誰かは訪はむ檜の葉の

そよぐは鹿のわたるなりけり

七重寶樹
黄金の根、紫
金の莖、白銀
の枝、珊瑚の葉、
條、瑠璃の葉、
白玉の華、眞
珠の葉の七重
樹立せる寶
八功德水
極樂淨土に在
りて云ふ八つ
の功德ある
水。澄淨。清
冷。潤美。輕
和。除患。增
益。

女院この歌あまりにあはれにおぼしめして、窓の小障子にあそびし留めさせおはします。かゝる御つれづれの中にも、おぼしめしなぞらふことどもは、つらき中にもあまたあり。軒に並べる植木をば七重寶樹とかたどり、岩間につもる水をば八功德水とおぼしめす。無常は春の花、風に從つて散りやすく、有涯は秋の月、雲に伴つて隠れやすし。承陽殿に花をもてあそびし朝には、風來つてにほひを散らし、長秋宮に月を詠ぜし夕には、雲覆うて光を隠す。昔は玉樓金殿に錦の蓐をしき、たへなりし御すまひなりしかども、今は柴引結ぶ草の庵、よその袂もしをれけり。

(平家物語)

上人
法然上人

重衡
清盛の子。永三年一の谷の戦に義経の軍に捕へられ、後鎌倉に送らる。翌年奈良に送られ、木津川に斬れる。一八四五年十一月八日

一 二 重衡受戒
土肥次郎實平が宿所には、門に家の幕引きわたして、一手の兵士小具足して成り居りたるが、上人と見るよりも左右に流れて色代す。法然房も殊勝なる侍の動作を見て、檜笠を脱ぎて目禮しつゝ、重衡の在す所に行く程に、實平かくと見て恭しく請じ入れぬ。「法然上人にて在しますかや。是は鎌倉殿の御家人伊豆の土肥次郎にて候。本三位中將の、上人を請じて後生のこと承らばや」と仰せ候ほどに、「何かは苦しかるべき」とて、斯くは御迎へまゐらせて候。御心残りのあらせられざらむほど、緩々と御物語あらせられ候へ」とて、

自ら奥の方に導き参らせぬ。

重衡はむら濃の直垂に二つ小袖して、烏帽子をきつと引立てながら、悦ばしげに出迎へて、先立つ涙を拭ひつゝ、斯くなりし身の願をもきこし入れ



法 給ふべくやと、心ならず候ひ
然 つるに、能く重衡を捨て給は
上 ざりしよ。「などて忘れ参ら
人 すべき。斯く再會し参らす
ること宿縁にてや侍りな

む。」法然房がほゝゑむ面を涙の奥より見上げ給ひし中將は、苦しき息をつきて、「重衡が昔の身にて侍りし時は、榮花に

南都炎上
重衡嘗て東大寺及び興福寺を燒く

須彌山
世界の中心に聳ゆる最高の山。もと印度古代の天文

誇り興樂憍々の心はありしかども、當來の昇沈顧る事侍らず。運盡き世亂れて後は、此處にて軍、彼處にて戰と申して、人を亡ひ身を助けむと勵ます。惡念は無間に遮つて、一分の善心會て起らず。就中南都炎上の事、君に仕うまつり世に隨ふ習にて、王命と申し父命と申し、衆徒の惡行を鎮めむ爲に罷向ふ所に、圖らざる伽藍の滅亡に及びしこと、力及ばざる次第なりと雖も、大將軍を勤めし上は、重衡が罪業と罷成り候ひぬらむ。其の報にや、多き一門の中に我が身一人生捕られて、京田舎に恥を曝すにつけても、一生の所行儂くて、拙きこと今ぞ思ひあはする。罪業は須彌よりも高く、善業は微塵も蓄へ侍らず。さても空しく終りなば、火血刀の

説。後佛典中に引用して佛説とする

火血刀
地獄を火途、畜生を血途、餓鬼を刀途と云ひ、三惡道の異名
四解脱經に「以三途一名火血刀也」

盛者心衰
盛者必衰、實經の虛(仁王)

苦果會て疑なし。出家の暇申し侍れども、せめての罪の深さに御免なければ、頂に剃刀を當て、出家に准へ、戒を受け奉り候はゞや。又かゝる罪人の一業をも免るべきこと侍らば、一句示し給へ。年來の見參その詮今に在り」と、搔口説きてぞ述べ給ふ。

法然房もいと憐れに聽きとりぬ。「誠に御一門の御榮華は、官職と云ひ俸祿と申し、傍若無人にこそ見え座しまし、か、今かくなり給へば、盛者必衰の理夢幻の如くなり。されば善につき惡につき、恨を起し悦をなす事あるべからず。電光朝露の無益の所、とてもかくてもありぬべし。永き世の苦みこそ恐れても恐れあるべきことにて侍れ。誠に御出

四部 四衆に同じ、
比丘・比丘尼・
優婆塞・優婆塞

三途 火途(地獄)血
途(畜生)刀途
(餓鬼)

三世 前世・現世・來
世

彌陀 阿彌陀の略
言

家こそ功德廣大なれども、御免なくばそれも詮なし。四部の弟子なれば、御髪をつけながらも戒を持たせ給はむこと、何の仔細あるべからず。受け難き人身を受けながら、空しく三途に歸し給はむこと、悲しみても猶餘りあり、歎きても亦盡くべからず。然るに穢土を厭ひて淨土を欣び、惡逆を犯して惡心を醸し、善根なうして善心を發し給はむ事は、三世の諸佛も定めて隨喜し給ふべし。先非を悔いて後世を恐るゝ、是を懺悔滅罪の法と申す。それにとりて出離の道區々なりと雖も、末法濁亂の機には稱名を以て勝れたりとす。罪惡深重の輩も愚痴闇鈍の族も、唱ふれば虚しからざるは彌陀の本願なり。罪深ければとて卑下し給ふべから

十惡 殺生・偷盜・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見

五逆 父を殺すこと、母を殺すこと、佛身より血を出すこと、阿修羅漢を殺すこと、和合の僧を破ること

一念十念 臨終に念佛を稱ふる謂ひにて、一聲を十一念と云ふ

無間 無間地獄、八

熱地獄の一、阿鼻地獄に同、生か罪に墮ちて苦を受くること、問断なくれば此の名がある
源空 法然上人の名

ず。十惡五逆も廻心すれば往生し、一念十念も心を致せば來迎す。經には、四重五逆諸衆生、一聞名號必引接と説き、釋には、忽遇往生善知識、急勸專修被佛名と判ぜり。假令無間の重罪なりと雖も、稱名の功德には勝つべからず。「利劍卽是彌陀號」保てば魔縁近づかず、「一聲稱念罪皆除」唱へば罪業残りなし。罪障を消滅して極樂の往生を遂げむこと、他力本願に若くはなし。いま源空より見參らすれば、御榮華の昔も今も變る事なき御身なり。されども有爲の習の悲しきは、未だ生を變へざるに斯かる憂目を御覽ずる上は、穢土をうたてき所ぞと思召し捨てさせられ、深く彌陀の本願を憑みましますば、必ず御往生疑あるべからず。これ全く源

空が私の詞にあらず、彌陀因位の悲願、或は釋尊成道の時説き置き給へる經教なり。一念も御疑心なく、一心に稱名を嗜み給ふべし。一座の說法懇篤に説き終りしかば、本三位中將は直垂のむら濃の色褪するまで、感涙を絞りて隨喜渴仰し給ひけり。

法然房は頓て剃刀を執りて、重衡卿の頂に三度まで當てぬ。始には三歸戒を授け、後には十重禁をぞ説きぬる。本三位中將信心肝に銘じて、御布施と思しくて、口に黄金蒔きたる双紙箱一合さし置き給へり。重衡が今の身にては何事も心に任せず。これ年來秘藏して候ひつるを、或侍の許に預け置きて、都落の折取忘れたりけるが、かゝらむ爲の徴なり

三歸戒
三歸は佛法僧の三寶に歸依するを云ふ
十重禁
十重禁戒の意、十重戒とも云ふ

須藤南翠
名は光輝、小説家

日野山
山城國宇治郡醍醐の南
阿彌陀
極樂淨土に住する佛
落日
色々の雲のほたてをかざりて入日や彌陀の光なるらむ

しか。願はくは大師上人、今の知識受戒の縁を以て、必ず來世の得脱を助け給へ。言ひもあへず泣き給へば、法然房は法衣の袖に双紙箱を包みて、何と云ふ詞は出さず、さすが涙に咽びつゝ、徐々と立出づるに、警固の武士等も皆鎧の袖をぞ濡したりける。(須藤南翠—法然上人)

一三 方丈記抄

(一) 日野山の奥

今日野山の奥に跡をかくして、南に假の日がくしをさし出だして、竹の簀の子を敷き、其の西に闕伽棚を造り、中には西の垣に添へて、阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日をうけて眉

普賢フゲン
文珠と共に釋
迦佛を輔くる
菩薩

不動

五大明王の
一、其の中央
に居る。大日
如來の化身

往生要集

六卷、叡山
川の傍、嚴院、
心僧都の作
惠

間の光とす。かの帳の扉に普賢並に不動の像を懸けたり。北の障子の上にちひさき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置く、すなはち和歌管絃、往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に箏、琵琶おのゝ、一張をたつ、いはゆる折箏、つぎ琵琶これなり。東にそへて蕨のほどもを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机をいだせり。枕の方に炭櫃あり、之を柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地をしめ、あばらなる姫垣を圍ひて園とす、すなはちもろもろの藥草を植ゑたり。假の庵の有様かくの如し。其の處のさまをいは、南に筧あり、岩をたゝみて水をためたり。林、軒近ければ爪木を拾ふに、ともしからず、名を外山

と云ふ、正木のかづら跡をうづめり。谷しげけれど西は晴れたり、觀念の便なきにしもあらず。春は藤波を見る、紫雲の如くして西の方に匂ふ。夏は時鳥を聞く、かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋は鯛の聲耳に充てり、空蟬の世を悲しむかときこゆ。冬は雪を隣れむ、積り消ゆるさま罪障に譬へつべし。

もし念佛ものうく讀經まめならざる時は、みづから休みみづから怠るに、妨ぐる人もなく又恥づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとり居れば口業を修めつべし。必ず禁戒を守るともしなければ、境界なければ何につけてか破らむ。もし跡の白波に身をよする朝には、岡の屋に

跡の白波
世の中を何に
たへむ朝に
らけ漕ぎゆく
船のあとの白
波(拾遺集)
岡の屋
山城國宇治郡
宇治村大字川
個莊の宇治川
に臨める所

滿沙彌滿沙彌の略、文武、元正朝頃の人、和歌を善くす

楓の風

淳陽江頭淳陽江頭、夜送客、風葉萩花初戀々々(琵琶行)

淳陽江

支那江西省九

江府德化縣に

ある川

源都督

桂大納言源經信、琵琶の名手、三船の名譽を得た

秋風の樂

盤洗調の曲

流泉の曲

一名菩提樂

行きかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし楓の風葉をならす夕には、淳陽の江をおもひやりて、源都督のながれをならふ。もし餘りの興あれば、しばし松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悦ばしめむともあらず。獨り調べ獨り詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

(二) 閑居の氣味

大かた此のところに住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今までに五とせを経たり。かりの庵もやゝふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔蒸せり。おのづから事のたよりに都を聞けば、此の山に籠りゐて後、やんごとなき

人のかくれ給へるもあまたきこゆ。まして其の數ならぬたぐひ、つくして之を知るべからず。たびの炎上に滅びたる家またいくそばくぞ。たゞ假の庵のみのどけくして恐なし。程せばしと雖も、夜臥す床あり晝居る座あり、一身を宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む、これよく身を知るに由りてなり。みさごは荒磯にゐる、すなはち人を恐るゝが故なり。われ亦かくの如し、身を知り世を知れば、願はずまじらはず、たゞしづかなるを望とし、愁なきを樂とす。

すべて世の人の住家を造るならひ、必ずしも身の爲にはせず。或は妻子眷屬の爲に造り、或は親昵朋友の爲に造る、或

は主君師匠および財寶馬牛の爲にさへこれを造る。われ
今身の爲に結び、人の爲に造らず。故いかんとなれば、今
の世のならひ此の身のありさま、伴ふべき人もなく頼むべ
き奴もなし。たとひ廣く造れりとも、たれをか宿したれを
か据ゑむ。

それ人の友たる者は、富めるを貴みねんごろなるを先とす。
必ずしも情あるとすぐなるとをば愛せず。たゞ絲竹花月
を友とせむにはしかず。人の奴たる者は、賞罰の甚しきを
顧み恩の厚きを重くす。更にはごくみあはれぶといへど
も、やすくしづかなるをば願はず。たゞ我が身を奴とする
に如かず。若し爲すべきことあれば、すなはちおのづから

身をつかふ、たゆみならずしもあらねど、人を従へ人を顧るよ
りは安し。もしありくべきことあれば、みづから歩む、苦し
といへども、馬鞍・牛車と心をなやますには似ず。今一身を
分ちてふたつの用をなす、手の奴、足の乗物、よく我が心に適
へり。心また身の苦しみを知れ、ば、苦しむ時はやすめつ、
まめなる時はつかふ。つかふとてもたび／＼すぐさず、も
のうしとても心を動かすことなし。いかに況や常にあり
き常に動くは、これ養生なるべし。何ぞいたづらにやすみ
居らむ。人を苦しめ人を惱ますはまた罪業なり、いかゞ他
の力をかるべき。

衣食住のたぐひまた同じ。藤の衣、麻の袈、得るに隨ひて肌

をかくし、野邊のつばな峯の木の實命をつなぐばかりなり。人にまじらはざれば姿を恥づる悔もなし。かて乏しければおろそかなれども猶味を甘くす。すべてかやうのこと、樂しく富める人に對していふにはあらず、たゞ我が身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。

三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば、牛馬七珍も由なく宮殿樓閣も望なし。今さびしきすまひ、一間の庵みづから之を愛す。おのづから都に出で、は乞食となることを恥づといへども、歸りてこゝに居る時は、他の俗塵に着することをあはれぶ。もし人このいへる事を疑はゞ、魚鳥の分野を見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざれば其の心

三界 欲界・色界・無色界、又單に三千世界の稱
七珍 七寶、金・銀・琉璃・水晶・瑪瑙・琥珀・珍珠

を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざれば其の心を知らず。閑居の氣味も亦かくの如し。住まずして誰か悟らむ。

一四 千波の湊

主上はしばらくは義綱を御待ちありけるが、あまりに事滞りければ、たゞ運にまかせて御出あらむとおぼしめして、ある夜の宵のまぎれに、三位殿の御局の御産のこと近づきたりとして、御所を御出あるよしにて、主上その御輿に召され、六條少將忠顯ばかりを召具して、ひそかに御所をぞ御出ありける。この體にては人のあやしめ申すべき上、駕輿丁もなかりければ、御輿を停められて、忝くも十善の天子みづから

主上 後醍醐天皇
義綱 佐々木富土名判官義綱
三位殿 隱岐に隨ひ参れる女房

忠顯 南朝の忠臣、源氏、家を千種或は六條又禪林寺と稱す。元弘中後醍醐天皇に從ひ、幾

許ならずして
帝と逃れて名
和長年に依り
兵を船上に九
集む一山に
九六

三月二十三
日
元弘三年

玉趾を草鞋の塵に汚して、みづから泥土の地を踏ませ給ひけるこそあさましけれ。

頃は三月二十三日のことなれば、月待つ程の暗き夜に、そことも知らぬ遠き野の道をたどりて歩ませ給へば、今は遙に來ぬらむとおぼしめしたれども、あとなる山は未だ瀧の響のほのかに聞ゆる程なり。もし追つかけ参らすることもやあるらむと、恐ろしくおぼしめしければ、一足も前へと御心ばかりは進めども、いつ習はせ給ふべき道ならねば、夢路をたどる心ちして、たゞ一所にのみやすらはせ給へば、これは如何にせむと思ひ煩ひて、忠顯朝臣御手を引き御腰を押し、今夜いかにもして湊邊までと心をやりたまへども、心身

千波の湊
チッリと讀
む、知夫郡に
ある舟つき

ともに疲れはて、野徑の露に徘徊す。夜いたく更けにければ、里遠からぬ鐘の聲の月に和して聞えけるを道しるべに尋ね寄りて、忠顯朝臣ある家の門を叩き、千波の湊へはいづくへ行くぞと問ひければ、内よりあやしげなる男ひとり出て向ひて主上の御ありさまを見参らせけるが、心なき田夫野人なれども、何となくいたはしくや思ひ参らせけむ、千波の湊へはこれよりわづか五十町ばかり候へども、道南北に分れて、いかさま御迷ひぬと存じ候へば、御道しるべ仕り候はむと申して、主上をかるゝと負ひまゐらせ、ほどなく千波の湊へぞ着きにける。

こゝにて時打つ鼓の聲を聞けば、夜はいまだ五更の初なり。

伯耆(ハウキ)
今、鳥取縣管
下の國

この道の案内者仕りたる男かひなくしく湊の中を走り廻りて、伯耆の國へ漕ぎもどる商人船のありけるをとかく語らひて、主上を屋形の内に乗せ参らせ、其の後暇申してぞ止りける。此の男誠に凡人にあらざりけるにや、君御一統の御時に、最も忠賞あるべし。とて國中を尋ねられけるに、我こそそれにて候へ。と申すもの遂になかりけり。(太平記)

一五 朋友選ぶべし

人は善き友にあはむ事をこひねがふべきなり。麻の中の蓬はためざるにおのづからなほし。といふ喩あり。蓬は枝ざし直からぬ草なり。されども麻に生ひ交りぬれば、ゆが

麻の中の蓬
云々
蓬生麻中
不扶自直
(荀子勸學篇)

顔氏家訓
隋代の人顔之
推の撰せるも

九條殿の遺
誠
莫伴高聲惡
狂之人(藤原
師輔遺誠)

みて行くべき道のなきまゝに、心ならずうるはしく生ひのぼるなり。心の悪しき人なれども、うるはしくうちある人の中に交りぬれば、さすがかれこれを憚る程に、自ら正しくなるなり。これによりて善き友にあはむことを、經にも説かれ文にもすゝめたり。顔氏が家訓には、
與善人居、如入芝蘭之室、久而自芳也。與惡人居、如入鮑魚之肆、久而自臭也。

と云へり。又或文には、人の心は水の入物にしたがふが如し。入物細ければ即ち細くなり、入物圓ければ即ち圓くなる。こゝろは朋友にならふ、何ぞ擇ばざるべけむ。と書けり。又九條殿の遺誠には、高聲惡狂の人に伴ふことなかれ。と教

薰蕕云々薰蕕不器而藏孔子家語
 芝澗に住み漢の商山の四皓・東園公・夏黃公・冉里先生・綺里綺
 竹林に籠り晉の竹林の七賢・嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎
 子猷は云々王子猷は東晉の友人安道を字づ。晉書に出づ。
 劉惔は云々劉惔は東晉の友人許惔の字。晉書に出づ。
 鄒枚鄒陽・枚乗と

へ給へり。かゝれば果敢なくうちかたらはむ友なりとも、よく其の人を擇ぶべし。薰蕕器を異にすべし」となり。ゆめゆめ心あしからむ人に伴ふべからず。花の下に春ばかりを契り、月の前に一夜を限る友までも情あるたぐひは忘れがたく思ひ出でらるゝものなり。すべて友をかたらふには、隔つる心なきを徳とす。芝澗に住みし四人の翁、竹林に籠りし七賢の類、さこそ思はしき友なりけむ。子猷は雪の夜月にあくがれて、遙に剡縣の安道を尋ね、劉惔は清風朗月に玄度のなきことを恨みける。まことに友のなからむには、如何なる興宴も物うくおぼえぬべし。さればこそ梁の孝王は鄒枚と聞えし二人の臣さりにしかば、兔園の遊を

もと漢の梁の孝王の臣
 兔園孝王の園の名。漢書に出づ。
 魯の仲尼は孔子・子路・子貢・子夏・子張・子游・子思・子羽・子西・子東・子南・子北・子西・子東・子南・子北
 云々孔子・子路・子貢・子夏・子張・子游・子思・子羽・子西・子東・子南・子北
 孟子孟子の子
 伯牙・鍾子期共に周代の人
 元稹と樂天共に中唐の詩人。樂天は白居易の字
 龍門一名河津、支那の山西省、黄河の上流

も停め給ひ、魯の仲尼は子路といひし思はしき弟子におくれて後は、人のすゝめけるしゝびしほをも捨て給ひにけり。孟母が子を思ふ故に、居を三度までかへけるも友を選ぶ意なり。伯牙・鍾子期といふは琴の友なり。鍾子期先だちて失せにければ、今は誰にか琴の音を聞き知られむとて、伯牙その絃を外して弾かざりけり。元稹と樂天とは詩の友にてありしが、元稹はかなくなりしかば、樂天その作りたりし詩どもを三十卷集めて、唐の大教院の經藏にぞ籠めおきける。遺文三十軸 軸々金玉聲 龍門原上土 埋骨不理名 とはこれを書きしなり。

後三條院
第七十一代
（一六九三—一七三三）
實政
藤原氏。後三條天皇の東宮たりし時、東宮に東宮學士たり。後甲斐國守となる

明智光春
光秀の從父弟。智勇あり。本能寺の變之先鋒たり。光秀山崎に破らるゝや、堀秀政と戦つて自刃す（一六二二—一六四二）
六月四日
天正十年（一六二二）
安土

後三條院東宮にておはしましける時、學士實政朝臣任國に赴きけるに、名殘惜しませ給ひて、

忘れずば同じ空とも月を見よ

ほどは雲ゐにめぐりあふまで

君なれども臣なれども、互に志深く隔つる思なきは、朋友にひとしと云へり。（十訓抄）

一六 明智左馬介の湖水渡り

さる程に明智左馬介光春は、六月四日隨身の兵六百餘人、江州安土の城に打入りしより以來、國士を懷け江州を平均し國々を治めんと、種々に思慮を廻らし居たるに、十三日に山

近江國蒲生郡山崎
山城國乙訓郡山崎
小栗栖野
山城國宇治郡今之醍醐村の邊
光秀
明智氏、本姓土岐、美濃の人、齋藤濃長に仕へ、近江坂本十萬石を食む。事を怨み、天正十年に京都本能寺に獄し、秀吉に敗れて土寇に殺さる（一六二二—一六四二）
羽柴
筑前守秀吉
坂本
近江國滋賀郡比叡山の東麓
向州
日向守光秀

崎の合戦味方敗績して、同苗十郎左衛門を始め、並川・山本・諏訪・妻木・奥田・齋藤・柴田・三牧・藤田等の勇士等討死し、剩へ小栗栖野にて大將光秀並に溝尾進士・比田等自殺せしときこえければ、安土の城下又々騒動し、羽柴が兵士はや押來る由さまさまに沙汰しければ、左馬介思ひけるは、爰にて獨り犬死せんより、坂本の城に入りて、向州が妻子、城代長閑齋等と安否を共にすべし。又は隙もあらば京都に忍び上り、秀吉を伺ひ討つか、二つの中に在りと思案を極め、諸方の集勢は悉く暇を出し、丹波勢千餘人、十四日辰の剋、安土の城に火をかけ一片の煙となし、かつ佐和山の荒木山城守、長濱の妻木主計頭兩人へ使を立て、各其の城を捨て、坂本へ一所に籠ら

長閑齋
明智光忠の
父弟

佐和山
近江國犬上
郡彦根の東
に在る丘岡

長濱
近江國阪田
郡琵琶湖の
東岸

池田勝入齋
名は信輝攝
津の人、秀吉
に仕へ美濃に
移封す(二一
九六―二二
四四)

堀久太郎
名は秀政、美
濃の人、秀吉
に仕へて戰功
があつた(二
二一三―二二
五〇)

打出の濱
近江國滋賀
郡膳所の北
方

大津
近江國滋賀
郡の西南隅、三
井寺山下、京
里を距る約四
臨む

狩野永徳
畫家狩野氏の
第五世、信長
秀吉に仕へて
法印に至る
(二二五〇―
二二五〇三)

るべし」と申遣し、直ちに坂本へぞ急ぎける。然るに羽柴筑前守が下知として、惟住五郎左衛門池田勝入齋堀久太郎等一萬餘人、安土と坂本とを志して一散に寄せ來る。左馬介は逞卒千餘人にて道を急げる所に、江州佐々木淺井家の浪人野武士等、此處に五百七百、彼處に千人千五百人、道を遮りて通さじものをと支へしに、左馬介事ともせず、引返しては打殺し、打破つては驅け通り、さんぶに戰ひて打出の濱に着せし時、千餘人の軍兵或は討たれ、或は山崎の變に心迷ひて落ちゆく者も少からず。今は石川幸治郎野村喜右衛門比田玄蕃野川新八藤田藤右衛門三宅傳八原半右衛門幼兒庄吉林半四郎荒木友之丞船木八之丞等、纔かに三百餘人

彌道を急ぎけり。此の時池田が先陣、堀久太郎秀政が千五百人と、端なく大津打出の濱にて出合ひたり。左馬介少しも恐れず、堀が千五百人の其の中へ、二百餘人を眞圓に備へ、嘯と喚いて突懸り、鎬を削り、鏑を割り、眞黒になつて戰へば、堀が士卒敵は小勢なりと侮りしに、左馬介が勇氣に打崩され、三町許り逃げたりけり。此の時左馬介が扮装は、黒絲に薄紅を緘し交へたる鎧を着し、白銀星の兜の緒を締め、大鹿毛と云ふ駿足に青磁の鞍を置き、厚總の鞆は燃立つばかりに朱に染めなし、此の頃の能畫狩野永徳が畫きし雲龍の白綾の陣羽織に、緋の裏打ちしを鎧の上に引被き、追つ返しつ戦ひしは、げに光秀が頼む勇士なりけりと、皆武者振を賞美

關寺
普近江國逢坂
山にありし

せり。堀久太郎味方を下知し、敵は僅かに二百許りぞ、引包んで切崩せ。」と、自ら馬を眞先に乗りいだす。堀が軍勢又盛返し、鬨を作つて突き来る。左馬介是を見て莞爾と笑ひ、やさしき敵の振舞かな。光春が最後の槍先冥途の土産に受けて見よ。」と、鎌十文字の槍打振り、村雲立つたる大勢の中へ、をつと叫んで馳せ入れば、荒木、石川、村上、野村、三宅を首とし、必死と極めし手垂の勇士、獲物々々をおつとつて、西に當り南へ追ひ、東を切り北へ靡かし、半時許り戦ひしが、軍勢討たる、もの三百餘人、關寺のほとりまで備を亂して逃げたりけり。左馬介つゝと出て味方を見れば、數剋の戦に悉く討死し、今ははや十六騎にぞなりければ、側なる石に腰打掛け、

三ツ瀬川
三途川に同
じ、一に渡り
河と云ふに
冥途に在り
云ふに死後
のものを死
に到るべき
岸に渡るに
所三あり、
深淵・有橋渡

爰にて討死すべきや、又切りぬけて坂本へ至るべしやと、暫く思案を廻らす所に、以前に懲りず堀が軍勢、後陣の惟住五郎左衛門が勢を併せ、雲霞の如く押寄せて、纒かなる左馬介が勢を餘すまじと取巻きたり。左馬介にたゞ、笑ひ、こは怪しからずの敵の振舞、手並は先に知りぬらん。いで三瀬川の道連にせん、來れやつ。」と大音に呼ばはり、槍を絞つて突き来る。左馬介が後より、ゆらりゝと立出づる六尺有餘の大男、げにも烈しく戦ひしと見えて、左右の大袖草摺も二三間ちぎれ落ち、兜は脱げて大童になり、其の年頃三十七八と見えて、頬骨たかく色黒く、圓眼、大口、髮髯逆しまに立上り、刃のわたり六尺餘の野太刀を右手に打振り、左手にみだれ

亡君
光秀を指す

閻魔

印度神話中、
死したる神に
となれる兄
妹をヤミと云
ふ。佛教中に
鬼の王とす
は地獄及び餓

仁王

門の左右に立
仁王。寺院中
密迹金剛神
方剛(右方)と
金の力士(左
教の守護神 佛

髪を搔きあげ、鐘を撞く許りの大音にて呼ばはりけるは、「日向守殿丹州征伐の時、保月の城主赤井悪右衛門を討ちとりし林半四郎武俊とは我が事なり。今日亡君追福のため、此所にて討死するぞ。武士の手本に見置きて、生き残らん者は後の世の物語にせよ。死せん者は閻魔の廳に我が名を傳へよ。きたれ」と野太刀を以て敵を招くは、さながら仁王の如くなり。堀惟住が軍兵ども此の勢に氣おくれし、後すざりして見えにけるに、こざかしき若者三十餘人、「しや、物々しき敵の振舞かな。いで討ちとつて高名にそなへん」と、白刃を並べ聲を合せて切つてかゝるを、半四郎得たり、おう。とかけ合せ、右に切りすゑ左へ薙ぎふせ、勇威粲然とあたりを拂ひ、速かなること電光の如く、人を討つこと大山の崩るゝに似たり。蜘蛛手に斬りたて角繩に拂ひ、人なき所を行くに異ならず。或は猿臂を延べて人礫をなし、又は一刀に三人五人打殺し、算を亂して働きしは、樊噲が勇、項羽が力もなどか是には勝るべきと、只一人に薙ぎたてられ、堀惟住が大軍は一同に崩れ立ち、さんふになりて逃げたりけり。半四郎は、「きたなし、かへせ」といふまゝに、逃ぐる敵を七八人打倒し、野太刀打捨て、兩手にて敵を二人引捕へ、勇士の討死を見よや」とて、湖水の中にとび入りて、終に其の名を打出の濱に残しけるは、恐ろしかりし有様なり。

左馬介光春は林半四郎が討死を見て、「あはれ大剛の者かな。」

樊噲

支那秦代、沛の
人。沛公に起
る。項羽は沛公
を殺すの意あり
に、項羽を擁護
し、項羽の提督
軍門に入りて、
軍門を視らし
て、沛公を圍り
て、事なきを得
た。

(—B.C. 189)

項羽

名は籍、楚の
下相の人。力能
く鼎を擧ぐ
(B.C. 203—
B.C. 202)

と歎息し、味方を見れば僅かに十四五騎皆深手・重疵を蒙り、生き永らふべき者一人もなし。光春涙を流し、汝等皆深手おひたるよな。此の期に至りて主従の契約を違へず、共に討死遂げ候事、忠心・義勇いつの世にか忘るべき。いざ心よく討死なし、三途の川を諸共に手を引きつれて渡るべきぞ。來れ〜。といさむれば、今まで太刀を杖につきて立ちかねたりし痛手の兵士、仰にや及ぶべき、主従三世の睦びあれば、後の世もなほ頼みあり。死出の合戦急ぐべし。と、偃つたる太刀曲りたる槍をふみ直し、勢ひこんで見えければ、左馬介心に喜び、三尺五寸の太刀眞向にさしかざし、堀惟住が數千騎の軍兵に一文字に切つてかゝれば、敵は大勢四方より取

圍み疊みかけて討つほどに、手負の從卒一人も残らず討死し、名を大津の濱に止めけり。

左馬介今は是までなり、さのみ罪作りて何かせんと、雲の如く集りし一千五百人の其の中を、わつと喚いて只一騎、利刀の竹を割る如く、只一筋に乗りいり、敵の兵士を蹄に懸け鎧に當て、忽ち一路の死人を築き、つと乗りぬけて一鞭くれ、一躍三丈、湖水の中に乗りこんだり。堀惟住が兵卒ども、あれよ〜。と呼ばはつて、磯端に並び立ち打眺めてぞ居たりける。さしも遙かなる湖に左馬介たゞ一人、かの雲龍の羽織、北叡山嵐に飜り、武具の文あざやかに、馬は名に負ふ大鹿毛、聲をかけ息をくれ、引上げ〜泳がせしは、風流と云ひ武勇

唐崎唐崎とも書く。近江國滋賀郡賀里村大津の湖濱。近江八景の一。

松永久秀阿波國三好長慶の老臣。正徳五年信長に

と云ひ、げに逞しき武士やと、數千の軍兵一時に、「よいやく」と響むる聲、琵琶湖の浪に響きつゝ、しばしは鳴りも止まざりけり。難なく唐崎の濱へ乗り上り、一つ松の下へ馬を寄せ、木の根に腰を打掛けて、遠山に日の丸を出せし軍扇を開き、暫らく暑氣を凌ぎける。京勢は、左馬介を討ちもらしぬる、残念なり」と、急に進んで追來る。左馬介これを見て、又馬に打乗りしづくと歩ませて、坂本の町に入り、十王堂の前にて馬を下り、手綱の輪を切りて堂の格子に括り附け、矢立を取出し、疊紙に「光春涉湖馬」と云ふ五字を書き、手取髪に結び附け、歩行して坂本の城に入りけり。是は光春寵愛の駿足なれば、城中にて俱に殺さんことの便なければ、此所に

叛して信貴城に據る。筒井順慶、城主に火を放ちて攻む。久秀、天目茶入を愛翫せる。器、平蜘蛛の釜を碎きて自殺す。(二二二、三三七)

後藤基次關ヶ原の役、東軍に屬し、大阪の役に従つて戦死した。

孝高黒田孝高

繋ぎ置き、敵に送りて馬の命を助けしなり。松永久秀が平蜘蛛の釜を打碎きしとは雲泥の相違なりき。(繪本大開記)

一七 後藤基次

基次人となり、軀幹壯大にして、相貌堂々、膂力衆に超え、打物執つては、萬夫の勇あるが上に、氣宇濶達にして、自ら將帥の器量を具へて居たので、大志の孝高は愛すること甚しく、心を盡して教養されただけ、基次も亦孝高を父の如く敬ひ慕ひ、弱年の頃から各處の戦鬪に従ひ、毎戦殊勳を建て、來た。此の間に在つて、彼の氣象を見る可き一事がある。孝高は關白秀吉を扶けて、九州を平定した功により豊前十八萬石

宇都宮鎮房
先祖は宗房、
六代奉行の頭
となつてから
九州にわたる
子孫代々鎮房
に住む。鎮房
は宗房から十
七代。城井谷
豊前國築城郡
狭度郷にある
谷

に封ぜられ、中津に治城したが、地方は久しい亂離の後を承
けた事として、土豪所在に割據して、容易に歸伏せぬ。中にも
宇都宮中務少輔鎮房といふ者最も頑強にして、城井谷の險
要に據つて、兇威を振つた。孝高の世子長政は之を心憎く
思ひ、孝高の節度をも待たず、基次等と此に押寄せ、火出づる
ばかり攻めたてたけれど、志を得ず、却つて敗退の已む無き
に至つたので、勝氣の長政は憤恨に堪へず、父上に合はず面
目が無いとて、髪を斷つて寺院に屏居し、一時謹慎の意を表
せられたから、從軍の諸士我もくと鬚を拂つて、之に倣つ
た。が、基次一人は平然として何の頓着も無い。同僚黒田
惣兵衛之を見兼ね、此の度の敗軍に就き、若殿を初めとし一

古賀侗庵
古賀精里の
子、徳川幕府
の儒官。弘化
四年六十歳で
歿

統謹慎を表するに、貴殿の其の體は何の意ぞ。」と咎められたれば、
基次は聴きも果てず、「一勝一敗は戰の習ひ、何の不思議がお
はさう。今日負けたらば、明日勝つ分別こそ肝要ではござ
らぬか。然るに一度負けたればとて、さばかり氣を屈する
やうでは、武將たらん事は思ひも寄らぬ。負けた度毎に頭
を剃りこぼたば、髪は長くなる日はござるまいよ。」と大口開
いて哄笑した。蓋し彼はかゝる咎の起るを待つて、餘りに
細心な長政を諷刺しようと思つたのであらう。大腹中の
孝高之を聞かれ、我が意を得たりといはぬばかり、即日一統
の遠慮を免ぜられた。これ蓋し基次二十八歳の頃の事であ
る。之に對する古賀侗庵の批評が面白い。

杜牧 支那唐代の
人、字は牧之
號は樊川、詩
文に長ず、杜
甫と別つ爲に
世人小杜と稱
す
勝敗兵家云
云
鳥江項羽廟の
詩中の句

杜牧が句に言はずや。勝敗兵家不可期、包羞含恥是男兒
と。一たび敗衄を経て、憤恨死を求め、若しくは慙怒措置當
を失ふ者は、皆其の器の小なるが故のみ。漢の高祖のしば
しば敗れて英氣少挫せず。これ其の克く鴻業を成せる所
以なり」と。孝高の基次に於ける、英雄、英雄を知るものとい
ふべきである。

(福本日南 大阪城の七將星)

一八 おらが春

一

「親のない、子はどこでも知れる、爪をくはへて門にたつ」と
子供等に唄はるゝも心細く、大方の人交りもせずして、裏の

畠に木萱など積みたる片陰にせぐゝまりて、永の目を暮し
ぬ。わが身ながらも哀なりけり。

われと来て遊べや親のない雀

二

樂しみ極りて愁ひ起るは浮世の慣ひなれど、いまだ樂しみ
半ばならざる千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛りなるみ
どり子を、寢耳に水の押來る如きあらゝしき痘の神に見
込まれつゝ、いま水膿のさなかなれば、やをら咲ける初花の、
泥雨にしほれたるに等しく、側に見る目さへ苦々しげにぞ
ありける。これも二三日経たれば、痘はかせぐちにて、雪解
の峽、土のほろゝ落つるやうに、瘡蓋といふもの取れば、祝

ひ囉して、さんだら法師といふを作りて、笹湯浴びせる眞似かたして、神は送り出したれど、ますく、弱りて、きのふより今日は頼み少く、終に六月二十一日の朝顔の花と共に、此の世をしぼみぬ。母は死顔にすがりて、よゝゝと泣くもむべなるかな。この期に及んでは行く水の再び歸らず、散る花の梢に戻らぬ悔いごとなど、あきらめ顔しても、思ひきりがたきは恩愛のきづななりけり。

露の世は露の世ながらさりながら

三

二十七日。晴。坊守朝とく起きて飯を炊きける折から、東隣の園右衛門といふ者の餅搗なれば、例の通りきたるべし。

小林一茶
信濃の俳人、
通稱太朗、
俳諧師と號
す。幼時母を
失うて、繼母
を養つた。六
十一年、六十五
歳で歿す。

冷えてはあしかりなん。ほかく湯けぶりの立つうち賞翫せよ。といふからに、いまやくと待ちて、飯は氷の如く冷えて、餅は遂に來ずなりぬ。

わが門へ來さうにしたり配り餅

(小林一茶—おらが春)

一九 上海公園のテニスコート

夕ぐれの散歩に出ようと言つて、OとOの娘のT子が誘つた。散歩に行くものが、幌馬車で出掛けるのだつた。途中でSを誘つて、都合四人で新公園に來た。公園と言つても、一面に平らな青芝の廣場だ。さうして驚くべきことは、まるで師團の練兵場のやうなこの廣場が、見廻す限り空地も

なげに、澤山なテニスコートになつてゐることだ。其のコートが、どれもこれも、盛んに使はれてゐることだ。たゞの練習をやつてゐるのもあり、マッチをやつてゐるのもある。ポンポンいふラケットの音と、彌次る聲とが入交つて、如何にも旺盛に見える。上海の遊技はテニス本位に凝固まつてゐるものとしか思はれないくらゐだ。

OとSとは、馬鹿に日本人がふえたものですねえ。などゝ感歎して話してゐる。「尤も西洋人は、自宅にコートを持つてゐるから、などともいふ。まともに落ちる、どこまでも遮ぎる物のない夕日の眩しさの爲であつたかも知れないが、私はこの幾百組のテニス競技者が、何處の國の者かといふ人

種問題などを元から考へずにあつたうつけさを自分で笑つた。尤も私に近い二組の競技者は、女を交へた西洋人であつたけれども、其の他の幾十組はなるほど皆同胞の青年だ。「さうら、山本のお箱だ。」と折節鮮かな彌次聲も聞える。

先夜上海紡績のK君の晚餐會に招かれた時、K君は其の職務上の話から、上海に於ける工業的先占權が、歐洲戰爭の爲に續々邦人の手に移りつゝある現状を語つた。「戰爭前と戰爭後とでは、邦人の數は約四倍殖えてゐる。それは植民地に於ける常態の無頼の遊民でなくて、職業の要求する自然の増加である。それほどに邦人の商工的勢力は、上海の財界に浸潤しつゝあるのだ。」と言つたやうな話が座中の口

口から漏れた。「講和後、歐洲の勢力が一時に挽回しようとして、もうそれと對等に競争し得る素地を擱んでゐる。」と昂然たる者もあつた。

植民政策の要訣は、結局金か人か、いづれかを惜まない事に歸着する。土俗に適する制度などは、其の上に被せられた裝飾なのだ。英、米、獨人などの今日までの政策、及び其の政策の成功は、ただ金主義であり、而も其の主義を徹底せしめたからだ。貧乏で人の餘る日本は、それと對抗し得ないで、今日まで已むなく雌伏の状態にあつた。けれども、唯一の對抗の道は、其の有餘る人を以てするの外は無かつた。戦争の痛手は急に癒えないと言つても、歐米の財力の殺到する時機は、眼前にあることを知らねばならない。「金を投ずるか、はりに人を投ぜよ」は、依然として我が植民政策の第一義であらねばならない。

今日在留邦人の發展と言つても、要するに鬼の居ぬ間の洗濯に過ぎないのだ。偶然の事が、我を氣樂な洗濯婆さんにしたのだ。正直に言へば、それは小さな弱々しい事だ。小さな弱々しい事であつても、それをしないよりは、いゝに違ひない。けれども、かうなつてしまつて、今度まともな敵の現はれた時、武者振り勇ましく戦はねばならない覺悟を誰が持つてゐるか。鬼の居ぬ間の洗濯は、言はばのんきな消極的な戦であつた。講和後の戦は、總てが積極的に悪戦苦

河東碧梧桐
名は秉五郎、
俳人

闘しなければならなくなるのだ。今日の我が先占權を以て難攻不落の要塞とする成算を講じて置きたいのだ。こんなことを言つたり考へたりした記憶のまだ新たな矢さきに、新公園のテニスの旺盛ぶりを見るのは、私達が言つたり考へたりしたこと、一具象的暗示であるやうな氣もするのだ。人意を強うするとしても言つた或快さが胸の奥底から湧上るやうな氣がした。
(河東碧梧桐——支那に遊びて)

二〇 岩崎谷

岩崎谷の入口に西郷南洲終焉の地がある。爪先上りの路の傍に石垣を繞らし、其の中に終焉の碑が寂しく立つて居

る。これより細路を上ること數町、岩崎谷の山峽に有名な洞窟がある。西南の役、薩軍敗れて故郷に歸つた後、二十餘日に互つて此の城山を死守した。其の間南洲翁の起臥したのが此の洞窟である。南洲は彈丸雨下の間に在つて少しも平常と異つた態度なく、終日碁を圍んで楽しんで居たさうである。偽作が多い南洲の詩の中で、彼の「百戰無功半歲間、首邱幸得返家山、笑儂向死如仙客、盡日洞中棋響閑」の一絶は、南洲の歿後洞中に残つて居た眞物であると云ふ。明治十年九月二十四日、西南革命軍最後の日は到來した。薩軍の保壘は盡く敗れ、残るは唯岩崎口の一壘となつた。官軍は岩崎谷の山上を占め、三面から洞窟の邊を瞰射した。

桐野利秋
村田新八
池上四郎
別府晋介
逸見十郎太
桂四郎

南洲翁は桐野・村田・池上・別府・逸見・桂等を始とし、四十餘名の將士と共に洞窟から岩崎口に向つて進行した。氣の早い連中は我が事已に去ると稱し、慨然劍に伏して自刃するもあつた。桐野のみは神色爽かに頗る暢氣であつた。桂・別府・逸見等は少し先んじて南洲翁に隨うた。此の時銃丸亂飛し、桂を初とし、將士數多將棊倒しに打斃れた。逸見は危急と見て南洲翁に向ひ、「もう此處らで可からうか」と促した。南洲は「まだ、まだ、本道に出てゆつくり死なう」と答へて其の儘に進んだ。一丁ばかりも行くと彈雨は益々繁くなつた。逸見は復び南洲に迫つた。南洲は「未だし、未だし」と答へた。終に進んで島津應吉邸の門前に行くと、山上からの流彈が

南洲の肩と股とを打ちぬいた。そこで應揚な南洲は靜かに別府を顧み、「晋どん、晋どん、もうよからう」と告げた。南洲は既に山の如く跪坐し、襟を正して東天を拜し、覺悟を示して居る。別府は負傷して駕に乗つて居たが、之を聽いて跳り出で、「先生濟み申さん、御恕しを」と衷心の一聲を發すると共に、南洲翁の首は別府の一刀によつて見事前に落ちた。温乎たる顔容、活けるが如く、宗徒の輩皆其の前に跪いて嗚咽涕泣した。「いざ諸共に塵の世を遁れ出でんは此の時と云々」と歌うた勝海舟の弔歌は、此の大自然兒の死を髣髴たらしむるには、あまり文飾に過ぎて居る。神仙の如く、嬰兒の如き大西郷が、「晋どん、晋どん、もうよからう」と言つて坐り

川内
鹿兒島の北西
三十哩にある
町

こんだ所に「先生濟み申さん、御恕しを。」と叫んで恩師の後に廻つた別府晉介を思ひ浮べると、何とも言へぬ、麗しい氣高い光景が偲ばれる。朴訥なる古老が薩摩なまりで「晉どん晉どん」の昔語は、一層聽く者をして感慨を深からしめた。岩崎谷の洞窟と終焉の地との中間くらゐの處に、川内^{シキナイ}方面行鐵道の隧道がある。隧道の入口の上部に「敬天愛人」と横に題した南洲翁の書が、大きく石に刻まれて居る。南洲の書は玄人筋では餘り譽めぬさうだ。併し「敬天愛人」とは何といふ好い句であらう。殊に此の句が南洲の手に書かれたのは何と好い調和であらう。淋漓^{シシ}たる墨痕と、南洲の風格とが、眼の前に浮ぶやうだ。「敬天愛人」は南洲翁の眞面目

である。一寸筆を染めても、直ちに此の四字が頭に浮ぶ所に、南洲の南洲たる風^{フウ}手^テが偲ばれる。忠君愛國とか赤心報國とかなら、誰の頭にも直に浮ばう。「敬天愛人」の四字は、南洲ならでは書くことのできぬ文字である。

敬天は即ち道理に對して敬虔の念に滿つることである。天爵を尊ぶものの前には、權力とか、位階とかは問題とならない。愛人は讀んで字のごとく人を愛することである。人を愛することは人道の根源である。天を敬し人を愛すれば、即ち信念と情熱とが充實し、是に、強く、高く、深く、麗はしい人格は大成する。其の人たるや大自然兒である、嬰兒の如き神仙である。南洲は實に其の人である。彼の權臣や

中野正剛
三宅雪嶺氏の
女婿、政論家

獵官者流が、一朝、位を獲て大得意となり、忽ち慢心を生ずるの
は、天に對し、道理に對し、敬虔の念を有たぬからである。彼の
富豪や成金が、利己心の驅る所、全く粒々辛苦する細民の苦痛を
氣にも掛けないのは、愛人の本性を磨かぬからである。闕族、權臣、
奸商、汚吏、彼等をして服膺せしめたいのは、「敬天愛人」の四字で
ある。

(中野正剛) 現實を直視して

大正副讀本 卷四終

大正十年十月十九日印刷
大正十年十月二十四日發行
大正十一年五月二日訂正再版印刷
大正十一年五月六日訂正再版發行

大正全 副讀本	卷一、 卷二、三、 卷四、 卷五、	金參拾五錢 各金參拾四錢 金參拾錢 金貳拾九錢	大正臨時 三時定 年度價	卷一、 卷二、三、 卷四、 卷五、	金六拾參錢 各金六拾壹錢 金五拾四錢 金五拾貳錢
------------	----------------------------	----------------------------------	--------------------	----------------------------	-----------------------------------



著者

保科孝一

東京市麴町區土手三番町三十六番地

發行者

合資會社 育英書院

東京市牛込區白銀町廿九番地

右代表者

目黒甚七



印刷所

株式會社 秀英舍

印刷者

佐久間衡治

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所
發賣所

東京市牛込區白銀町廿九番地
振替口座(東京)七四二二番
東京市京橋區南傳馬町二丁目
振替口座(東京)二八〇九番

合資會社 育英書院
目黒書店

